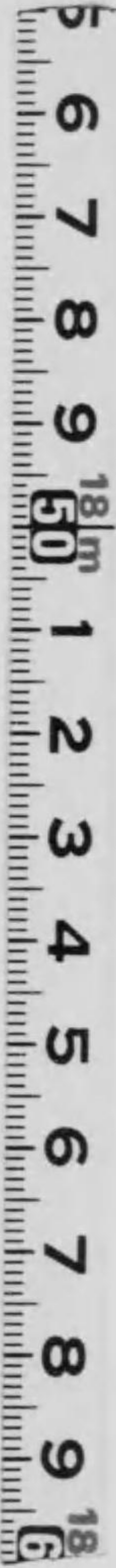




11
302

浮世繪の諸派
上



始



原
榮
著

浮世繪の諸派

東京
弘學館發行

大正
8. 12. 18
東京

謹んでこの書を
高嶺先生の靈前に獻ぐ

はしがき

自分が奥州の山中から始めて東京に出たのは、明治十七年の秋であつた。それ以來高嶺麟山先生の許にあつて、十年間學生生活を送つたのである。先生は書物好きで、暇さへあれば讀書に耽つて居られた。又道樂としては浮世繪に限らず、美術と名の付くものは、何でも好きであつたが、筆無精の方で、今日となつて先生の美術上の意見や感想を窺ふべき記録類は更にない。最も先生は博く讀み深く味つて、修養を積み趣味を養ひ、心を高め行を深くして、子弟を教育し、世人を指導して行く材料とすれば足る、といふ考であつたやうで、所謂不言實行家の方であつたと思はれる。

處が、明治二十年頃からであつたと思ふ、先生は米國人ビグロウ氏やフェノロサ氏などと、浮世繪を鑑賞して居られたのを、時折見ることがあつた。然し

自分は碌々目にも止めず、氣にも付けずに居つたが、漸々立ち止つて側で見ると心も起り、後には市中を散歩して、古本屋の店頭第一に浮世繪が目に付く様になり、終には焼芋代を浮世繪に流用して、豊國の三枚額を、鬼の首でも取つた氣持で、持ち歸るやうになつた。かくして一旦買ひ入れたものは、畫者の傳も知りたくなり、繪の善し悪しも尋ねて、己が手柄を表はしたいやうな氣にもなつて、先生に見せて批判を乞ひ、又は自ら、浮世繪類考などを寫して、慰みとするにも至つた。とかくする中に、不完全ながらも學業を卒へて地方へ下り、教鞭を執る身となつた。時は明治の二十七年春のことであつた。

それから以後今日に至るまで、田舎生活を送つて居るのであるが、公務の餘暇には浮世繪に限らず、廣く美術と名の付くものは、見もし、聞きもし、買ひもし、調べもして、その都度紙片に書き置いたものが、一の小筐に充つる程になつた。そして今では美術品や古本に接するのは自分が唯一の道樂となつて、嬉しい時も悲しい時も忙しい時も、暇ある時も、繪畫や古本などに向へば、おのづと心の慰籍となり、頭の洗濯となつて、自分にとつては何よりの心機轉換法となるのである。

然るに明治四十三年二月二十一日、突然先生薨去の電報に接し、夢路を辿る思ひで、即時上京したが、既に葬儀事務分擔も出來て居つたから、自分は同家美術品調査の任を受けて、久し振りで各種の美術品に接したが、混雑中賞翫などの念も起らず、唯現品調査に止つたのであつた。が、その年の春休には上京して、目錄を拵へてくれとの御話であつたから、休暇になるや倉皇出京すると、今度は又令室の御不幸、そも今年は如何なれば、かくも高嶺家に死の神の見舞ふことであらう、と顔見合はす人毎に歎き合つたが、詮方もなく野邊の送りの形如く濟み、唯新しき位牌の二つ竝んで見えるのが、一段と涙の種であつた。かやうな騒ぎで、目錄も出來ずに田舎に歸つた。

そこで今度は同年の暑中休暇に上京して、それらの整理や目錄の調製に従事した。この時は時日の制限もなく、靜かな涼しい裏座敷で、自分獨り夏の暑

さを避けつゝ、見ては書き、書いては観つゝ、行く間には、同家寄寓の昔、先生と共に觀て慰んだものもあり、或は始めて接するものもあり、或は自分が發見して買ひ入れた手柄のものもあつて感慨無量往事を追想して

もろともにめでし浮世のうつし繪は

今ぞわが世のかたみなりける

など、三十一文字を並べて、思を遣つたこともあつた。この時は二十年來見慣れた浮世繪しかも肉筆、版畫、版本など、勝手に座の前後左右に擴げ廻して、見惚るゝこともあり、見較べることもあり、書き記すこともあり、取り調べることもありで、永き夏の日を綠樹蔭涼しき小石川の高嶺邸で、繪畫の中に埋つて居た、眞に浮世の外に起臥して居る思であつた。目錄もどうにか出來上つた。教鞭を執る日も近づいて來た。そこで又田舎の人となつた。

過去二十年間は、在京當時こそ一時熱中したこともあつたが、地方に下つてからは、浮世繪に限らず、他派の繪も又書も陶磁器もといふやうに、所謂骨董趣

味が出來て、學餘の唯一慰安となつて來たが、この夏以來は、燃木杭に火のついたやうに、浮世繪熱が復活した。といつても、何も夢中に道具屋を探し廻るといふ譯ではなく、全く昨夏高嶺家で見えた浮世繪の印象が吾を驅つて、本夏の休暇には、年來心覺えに記して置いた反古を整理したり、多少蒐集して置いた浮世繪や繪本などを分類して、折節の趣味の推移せし痕を見て、自分ながら面白さ可笑さを禁じ得なかつた。そして終には一小冊子に纏めて先生の靈前に供へ、且つは同好諸士の博覽に資せんといふ念も起つたのである。

本書は、以上の如き動機から、五年前の夏に筆を執り始めたのであるが、業餘の仕事ではあるし、或る事情の爲め一時中止したこともあるし、かたゞおくれにおくれて、本年本月やうやく出版することゝなつたのである。けれども高嶺先生七回忌辰前に出來上つたのは、誠によろこばしい次第である。

大正五年二月

原 榮 するす

凡 例

一、自分は浮世繪に接する毎に、畫家の傳記、畫系、生歿年月、畫風の變遷などを調べて見たが、諸書の記すところがまち／＼でいつも判定に苦しんだから、其都度研究したものを、心覺えに書き留めて置いた。それを今度重みな材料として、其外にも多少新たに補つて、雜駁なこの一冊を作るに至つたのである。

一、本書は、時期の區劃を便宜のため六期に分け、主として各時期の代表畫家を論じ、その他同期畫家に就いても述べ、また浮世繪に關係深き版畫版本の種類、色摺の起原發達などをも記した。勿論畫家の夭折と長壽及び早熟と晩熟とによつて作畫期に長短遲速を生じ、随つて畫家の配列順序にも關係するのであるが、本書六期の區劃は、畫家の歿年を標準として大體に定められたのである。

一、挿繪が種々の都合で、豫期して居つた如くならなかつたのは遺憾であるが、所藏諸君の快諾を得て、原版又は寫真から複製することが出来たのは誠に喜ばしく厚く謝意を表する次第である。また引用書目は二度目からは略して書いてをる。たとへば「浮世繪類考」は單に「類考」寫本、増補「浮世繪類考」は寫本、増補類考、名人忌辰録は「忌辰録」と記す類である。

一、近き過去に於て、各派の浮世繪に就いて研究したものは、審美書院發行の「浮世繪派畫集」で、浮世繪版畫の發達史を攻究したものは、浮世繪研究會出版の「木版浮世繪大家畫集」であるが、拙著は性質上前者によつて特に得るところがあつたのを衷心感謝して居る。またこの書を発表するに就いて、有益な助言を與へられ、或は斡旋の勞を執られた芳賀文學博士、志田文學士、天沼文學士、立澤文學士、關如來君、渡邊庄三郎君の御厚意に對して深く御禮を申し上げます。

浮世繪の諸派目次

總説

初期 (寛永元—寛文一二、西曆一六二四—一六七二)

一、岩佐又兵衛尉勝以 附同勝重……………一五

二、又兵衛前後の浮世繪諸家……………二七

北村忠兵衛、山本理兵衛、辻村茂兵衛、兼川孫兵衛、海北忠左衛門、花田内匠、野々口立圃

三、大津繪と又平……………三〇

四、版畫、版本の種類(其一)……………三六

墨摺木版、繪とり本(丹綠本)

第一期 (延寶元—正徳五、西曆一六七三—一七一五)

目次

二

- 概説……………二
- 一、菱川師宣……………四
- 二、英一蝶……………五
- 三、懷月堂……………六
- 四、鳥居清信……………七
- 五、同期浮世繪畫家……………八
 - 小川破笠、宮崎友禊、石川流宣、藤源三郎、吉田半兵衛、
 - 月直清親、山本傳六、居初津奈女、井上勝吉、杉村治信、
 - 井上勘兵衛、大森善清、東坡軒、杉村正高、探幽齋正信、
 - 川島敏清、
- 六、版畫、版本の種類(其二)……………八
 - 丹繪、漆繪、赤小本、赤本、黒本、浮世草子、八文字屋本

第二期 (享保元—寛延三、西曆一七一六一—一七五〇)

- 概説……………三
- 一、西川祐信……………四
- 二、宮川長春……………五
- 三、西村重長と羽川珍重……………六
- 四、奥村政信……………七
- 五、鳥居清倍……………八
- 六、同期浮世繪畫家……………九
 - 近藤清春、橋守國、川枝豊信、繪菱忠七、中路定年、
 - 野々村治兵衛、宮川長鶴、宮川一笑、梅翁軒永春、松野親信、
 - 西川照信、梅祐軒勝信、空明堂信之、西川豊信、
- 七、浮繪に就いて……………一〇
- 八、版畫、版本の種類(其三)……………一一
 - 紅摺繪、草繪、雲母繪、藍繪、黄表紙、合巻、讀本、

目次

三

第三期 (寶曆元—天明八、西曆一七五一—一七八八)

概説……………一七

一、月岡雪鼎と鳥山石燕……………一四一

二、石川豊信……………一四四

三、鈴木春信と磯田湖龍齋……………一四九

四、勝川春章と鳥居清満……………一五三

五、歌川豊春……………一六〇

六、北尾重政……………一六四

七、司馬江漢……………一六六

八、同期浮世繪畫家……………一七四

長谷川光春、富川房信、一筆齋文調、藤 關月、戀川春町、
竹原春朝齋、石川豊雅、常 正、常 行、柳 文朝、
駒井義信、山本重春、

九、彩色摺の起原及び發達……………一七七

第四期 (寛政元—文政一二、西曆一七八九—一八二九)

概説……………一八七

一、鳥居清長……………一九八

二、喜多川歌麿……………一九三

三、葛飾北齋……………一九九

四、北尾政演と同政美……………二〇九

五、細田榮之……………二一六

六、歌川豊國と同豊廣……………二二〇

七、同期浮世繪畫家……………二二六

勝川春潮、同 春英、同 春好、柳川重信、魚屋北溪、
跡齋北馬、丘亭春信、二代目戴斗、窪田俊満、東洲齋寫樂、

岡田玉山、石田玉峰、速見春曉齋、松川牛山、山口重春、西村中和、

第五期 (天保元—明治廿五、西曆一八三〇—一八九二)

概説

- 一、歌川國貞……………三九
- 二、菊川英山と鳥居清峯……………四九
- 三、池田英泉……………五三
- 四、安藤廣重 附二代及三代廣重……………五七
- 五、歌川國芳……………六四
- 六、同期浮世繪畫家……………六九

梅蝶樓國政、玉蘭齋貞秀、歌川貞升、豐原國周、河鍋曉齋、大藤芳年、葛飾爲齋、柳川重山、鮮齋永濯、

目次終

挿繪目次

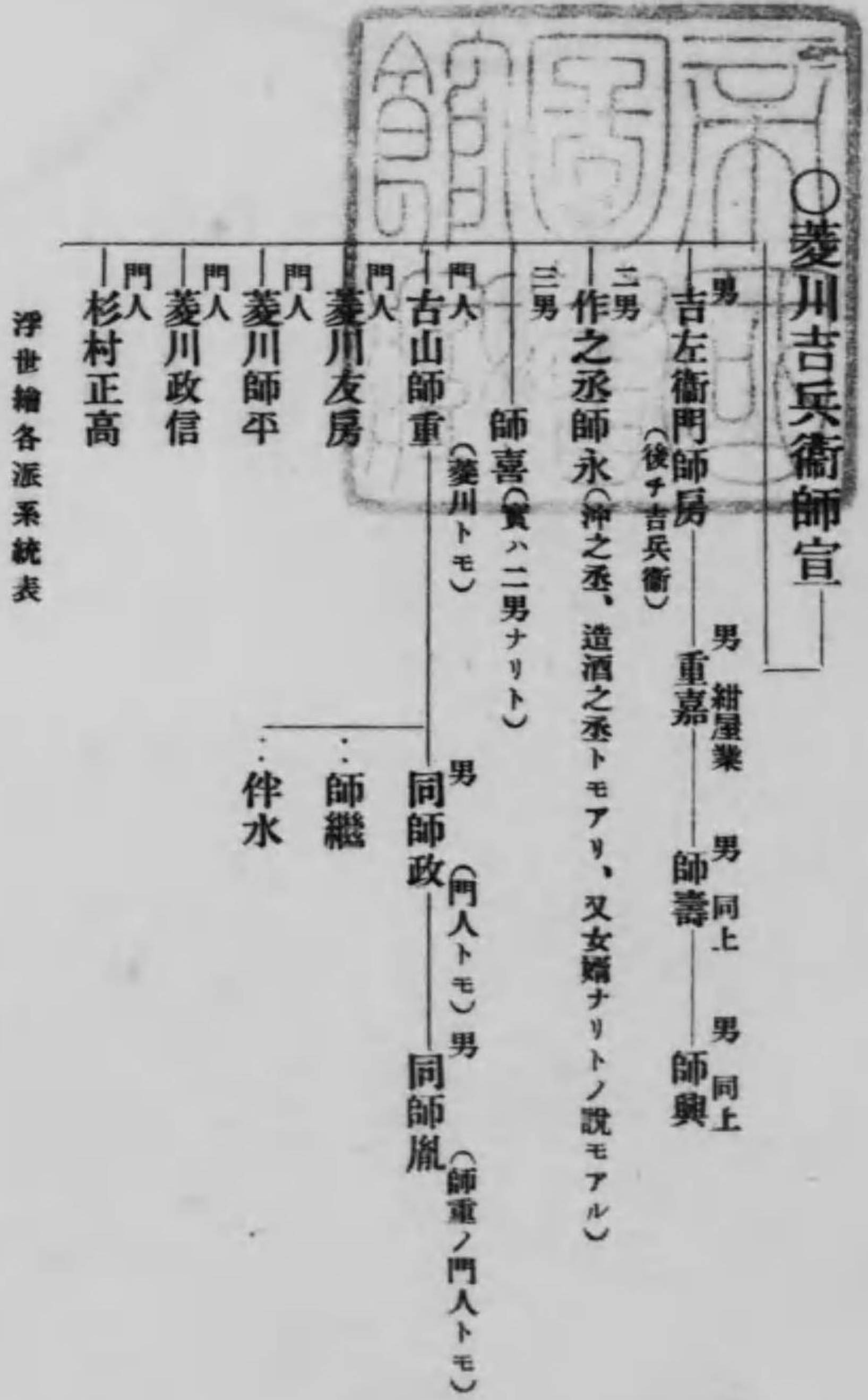
- 一、岩佐又兵衛勝以筆 男女遊樂圖 肉筆紙本 泥引著色 浮世繪派畫集所載……………六一七
- 二、菱川師宣筆 演劇隅田川圖 肉筆絹本 著色 東京帝室博物館藏……………六一七
- 三、英 一 蝶筆 小町踊圖 肉筆著色十二ヶ月風俗の内 著色 浮世繪派畫集所載……………六一七
- 四、懷月堂度秀筆 美人少女圖 版畫著色 同……………六一七
- 五、鳥居清信筆 美人少女圖 大筆模刻 著者……………六一七
- 六、西川祐信筆 婦人圖 大筆模刻 同……………六一七
- 七、宮川長春筆 手鞠美人圖 大筆模刻 同……………六一七
- 八、西村重長筆 戀の重荷 細繪、紅繪 河合堯永氏藏……………二〇七
- 九、奥村政信筆 お七、吉三 細繪、紅繪 木浮世繪大家畫集所載……………二二三
- 一〇、二代鳥居清信筆 花賣若衆圖 細繪、紅繪 同……………二六二
- 一一、鳥居清倍筆 役者 細繪、紅繪 同……………二四一
- 一二、石川豊信筆 美人幼兒遊戯圖 細繪、紅繪 河合堯永氏藏……………二四一
- 一三、鈴木春信筆 婦女圖 大筆模刻 著者……………二六一

一四、磯田湖龍齋筆	遊女揃圖	大錦	同	...
一五、勝川春章筆	雙嬌漫歩圖	肉筆絹本	浮世繪派畫集所載...	二四一—二五
一六、鳥居清滿筆	役者	細繪、紅繪	内藤馬藏氏藏...	二八—三九
一七、歌川豊春筆	深川八幡圖	浮繪、大錦	木浮世繪大家畫集所載...	三〇—三三
一八、北尾重政筆	菊合、鹿の笛	中判	同	...
一九、司馬江漢(春重)筆	時雨	中判	著者藏...	...
二〇、鳥居清長筆	御料	柱懸	著者藏...	...
二一、喜多川歌麿筆	男女遊宴圖	大錦	同	...
二二、葛飾北齋筆	甲州石斑澤圖	大錦	同	...
二三、北尾政演筆	二美人圖	中判	著者藏...	...
二四、細田榮之筆	遊女揃圖	大錦	内藤馬藏氏藏...	...
二五、歌川豊國筆	夏の富士美人合	大錦	著者藏...	...
二六、二代歌川豊國筆	乗合源氏	三枚綴繪	著者藏...	...
二七、菊川英山筆	女箱屋	掛物繪	同	...
二八、池田英泉筆	傾城圖	掛物繪	同	...
二九、安藤重筆	飛彈籠渡の圖	大錦	内藤馬藏氏藏...	...
三〇、歌川國芳筆	東都名所今戸圖	大錦	酒井佐保氏藏...	...

浮世繪各派系統表

備考(單線ハ父子師弟ノ關係ヲ表ハシ、點線ハ相承未定ノモノ)

一 菱川派



浮世繪各派系統表

- ・杉村治信
- ・石川流宣
- ・菱川師秀
- ・菱川師盛
- ・菱川和翁
- ・菱川新平
- ・山崎龍女
- ・東坡軒
- ・里水
- ・水鷗
- ・古川昌信

二 英派

○英一蝶

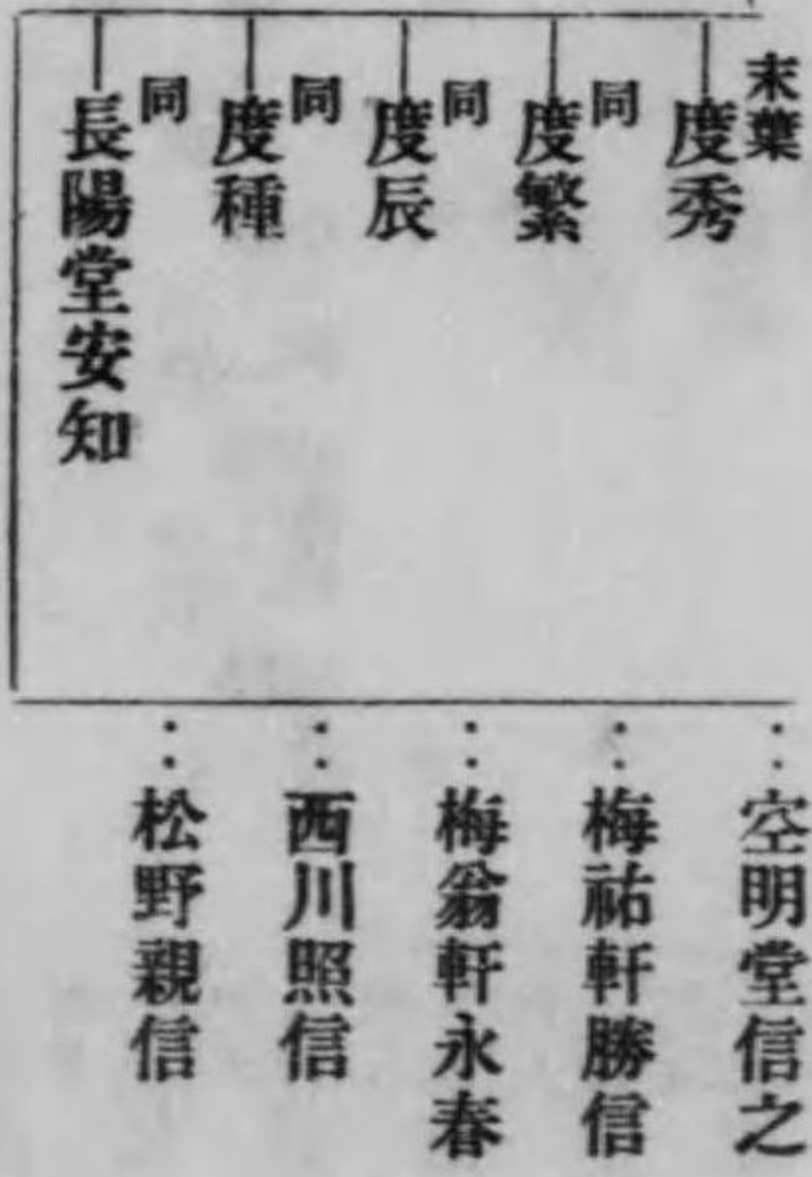
浮世繪各派系統表



門人 嵩峨
門人 嵩雨

三 懷月堂派

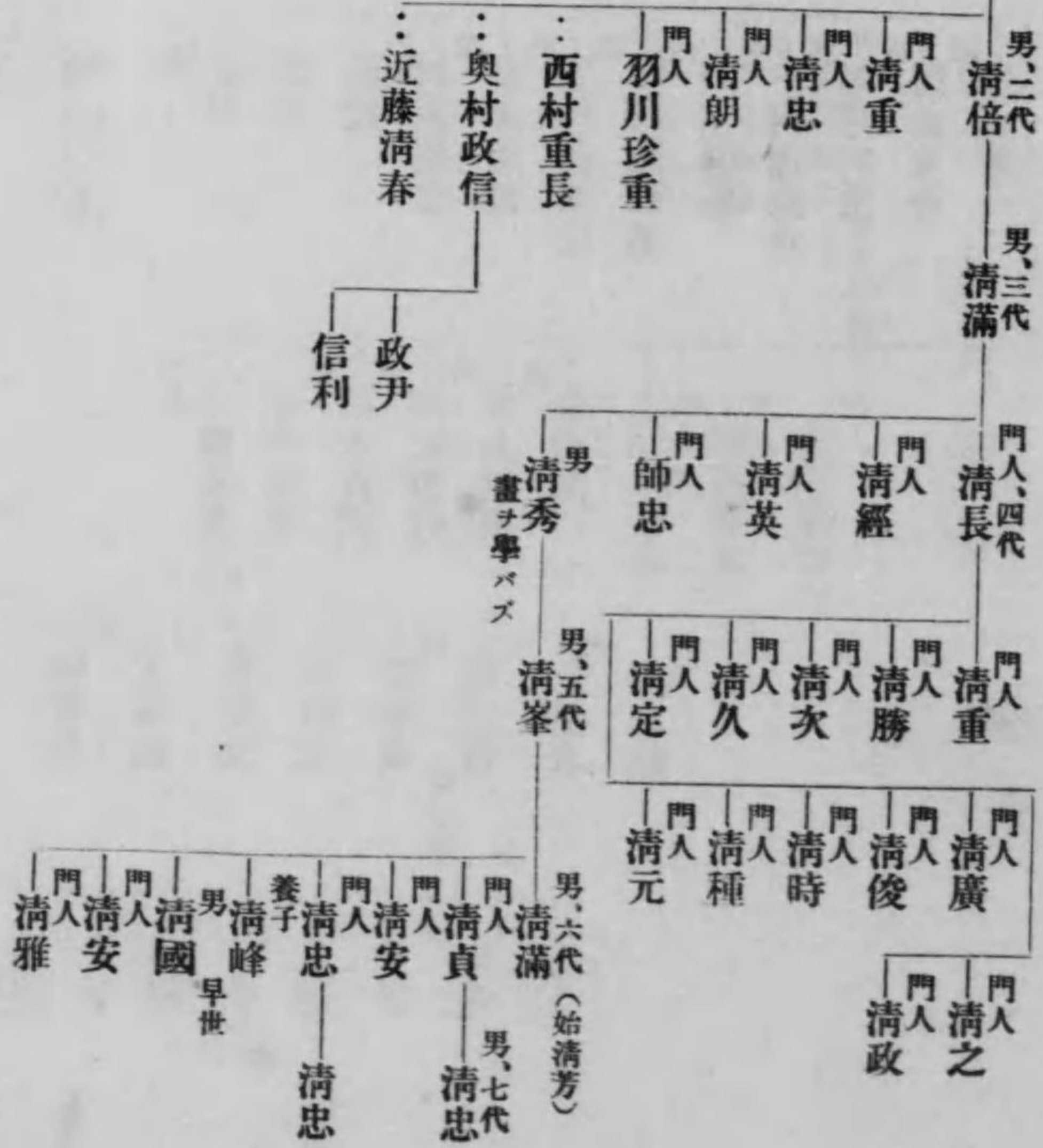
○懷月堂安度



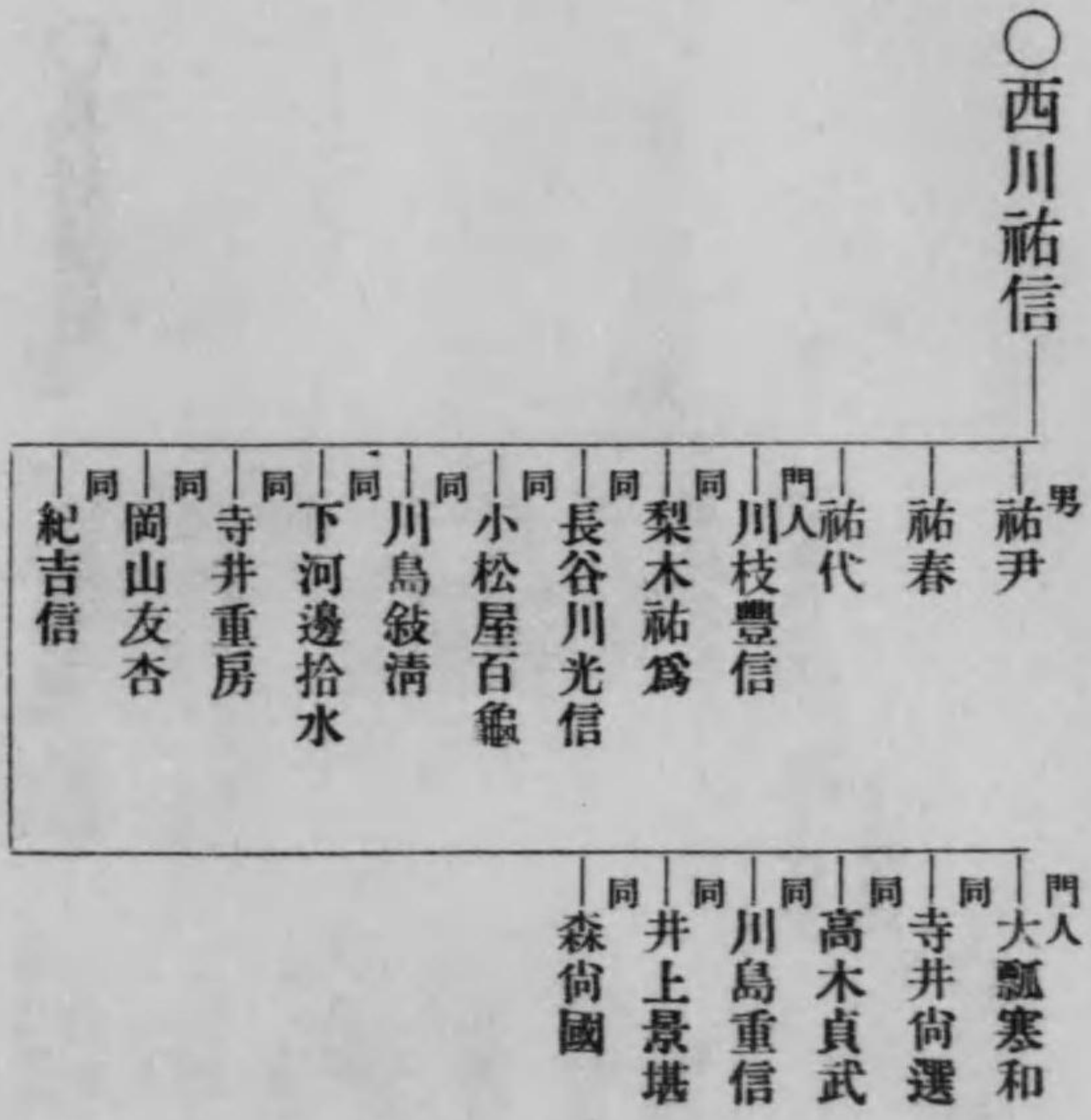
(コノ英氏系譜ハ川崎千虎氏ガ諸書ヲ考ヘ英一騎氏ニモ家傳ノ説ヲ聞キ彼是參照取捨シテ新タニ作ラレタルモノ國華五五號所載)

四 鳥居派

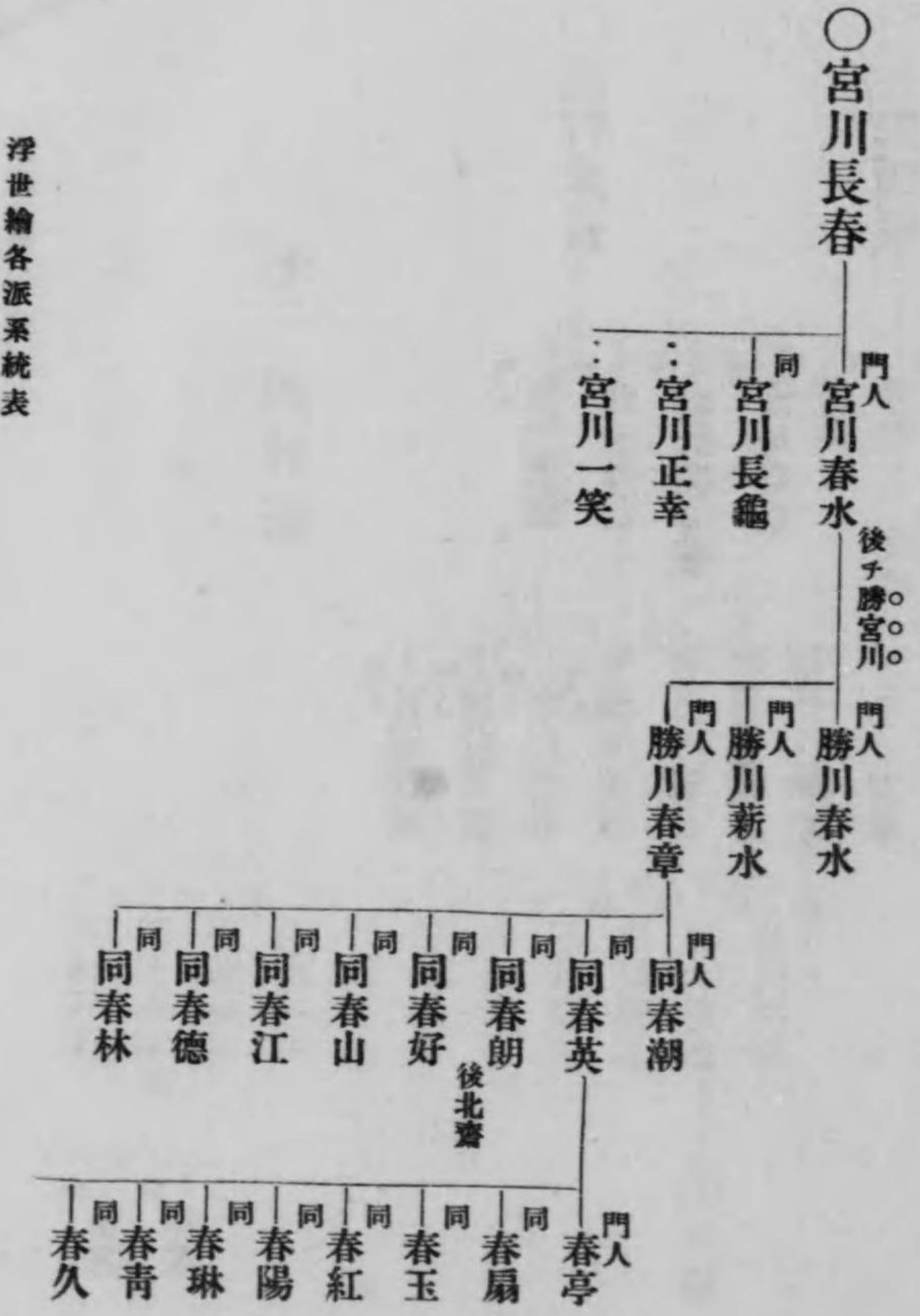
○鳥居清信



五 西川派



六 宮川、(勝宮川、勝川)派



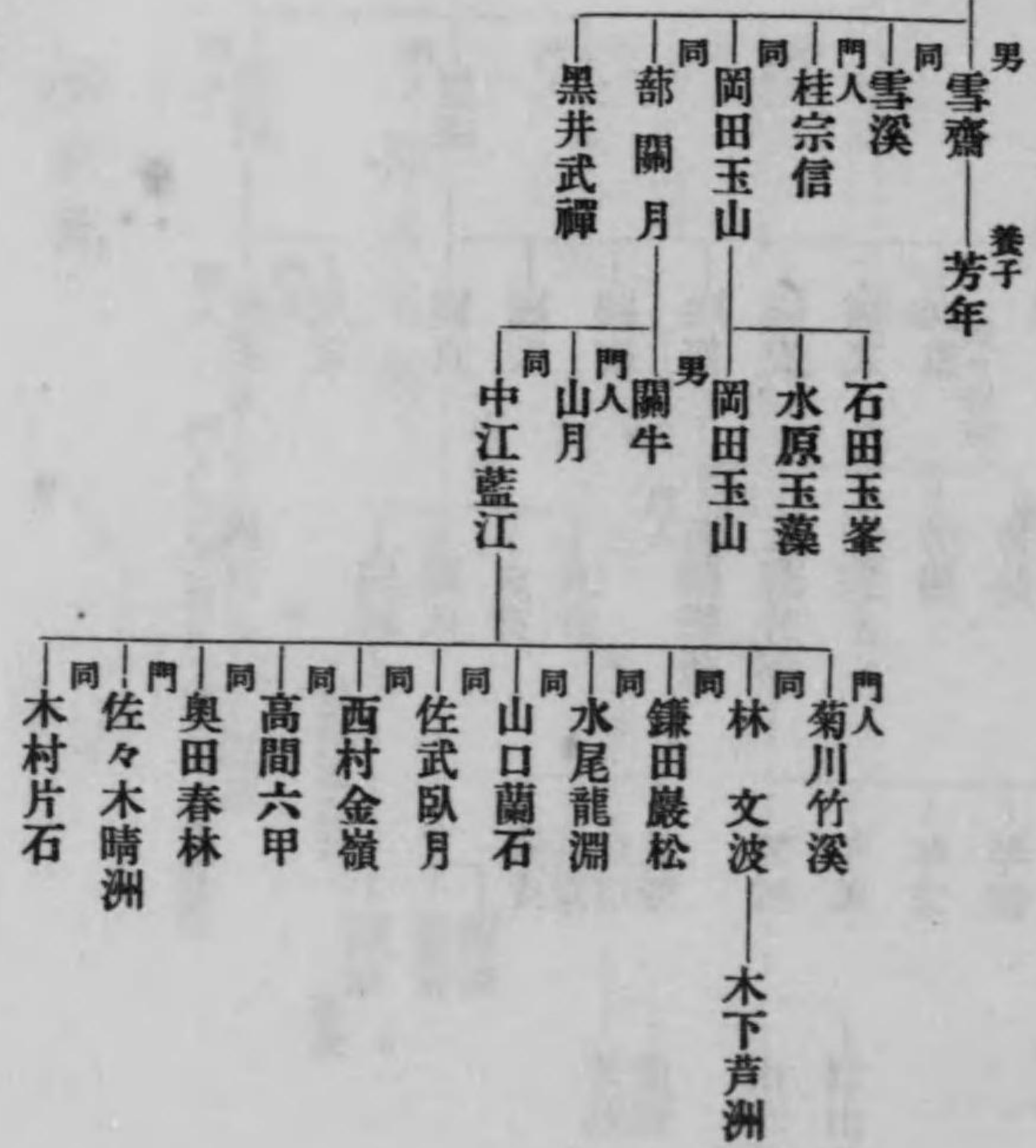
七 西村派



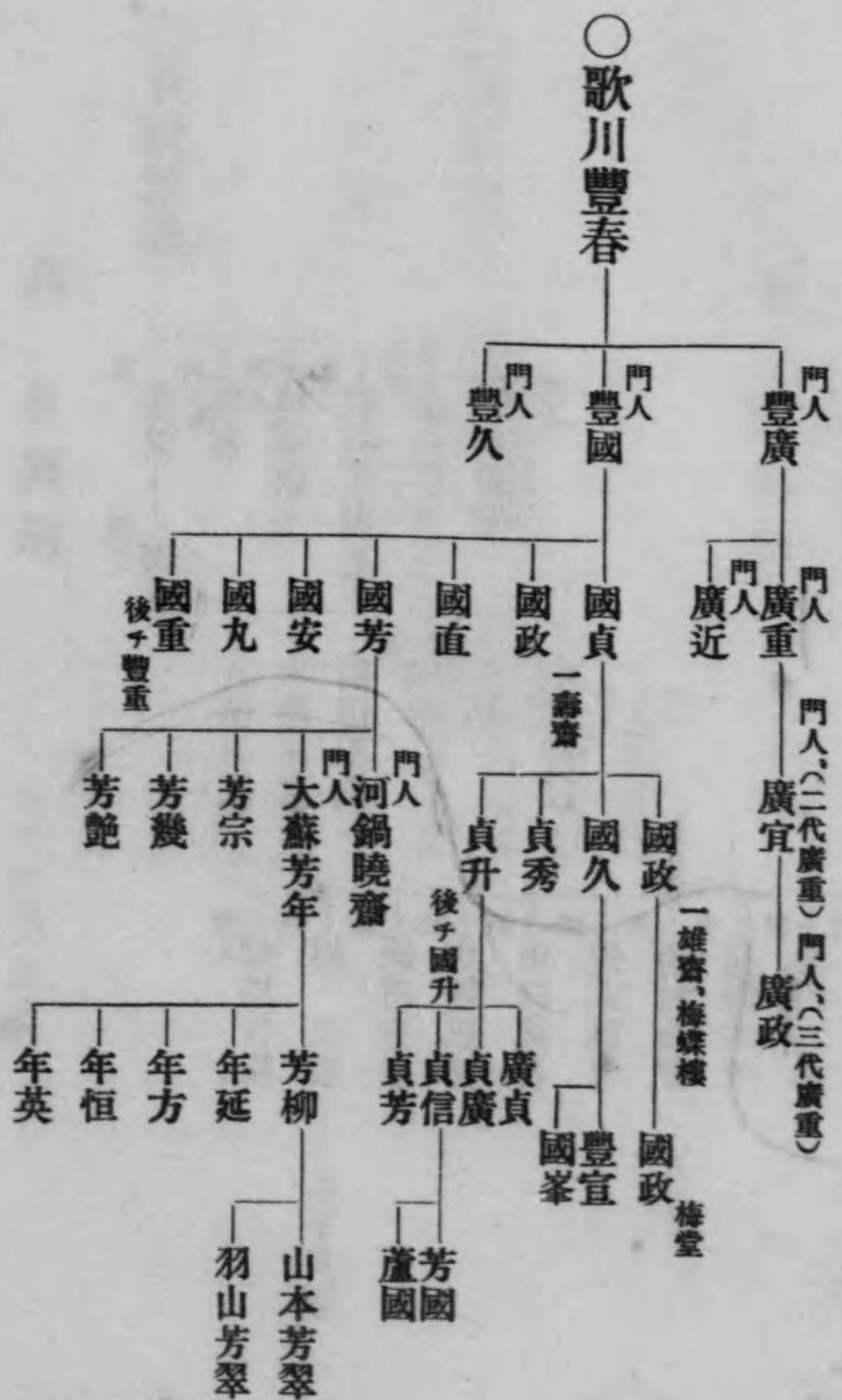
同 春洞
同 春雪

八 月岡派

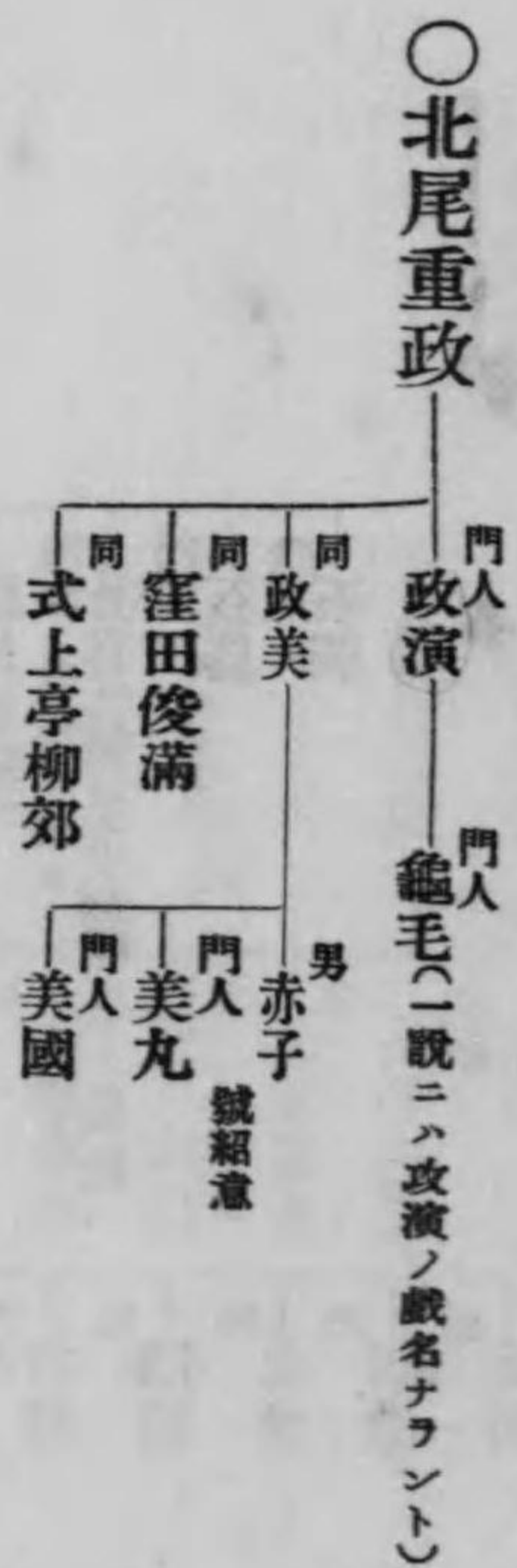
○月岡雪鼎



九 歌川派



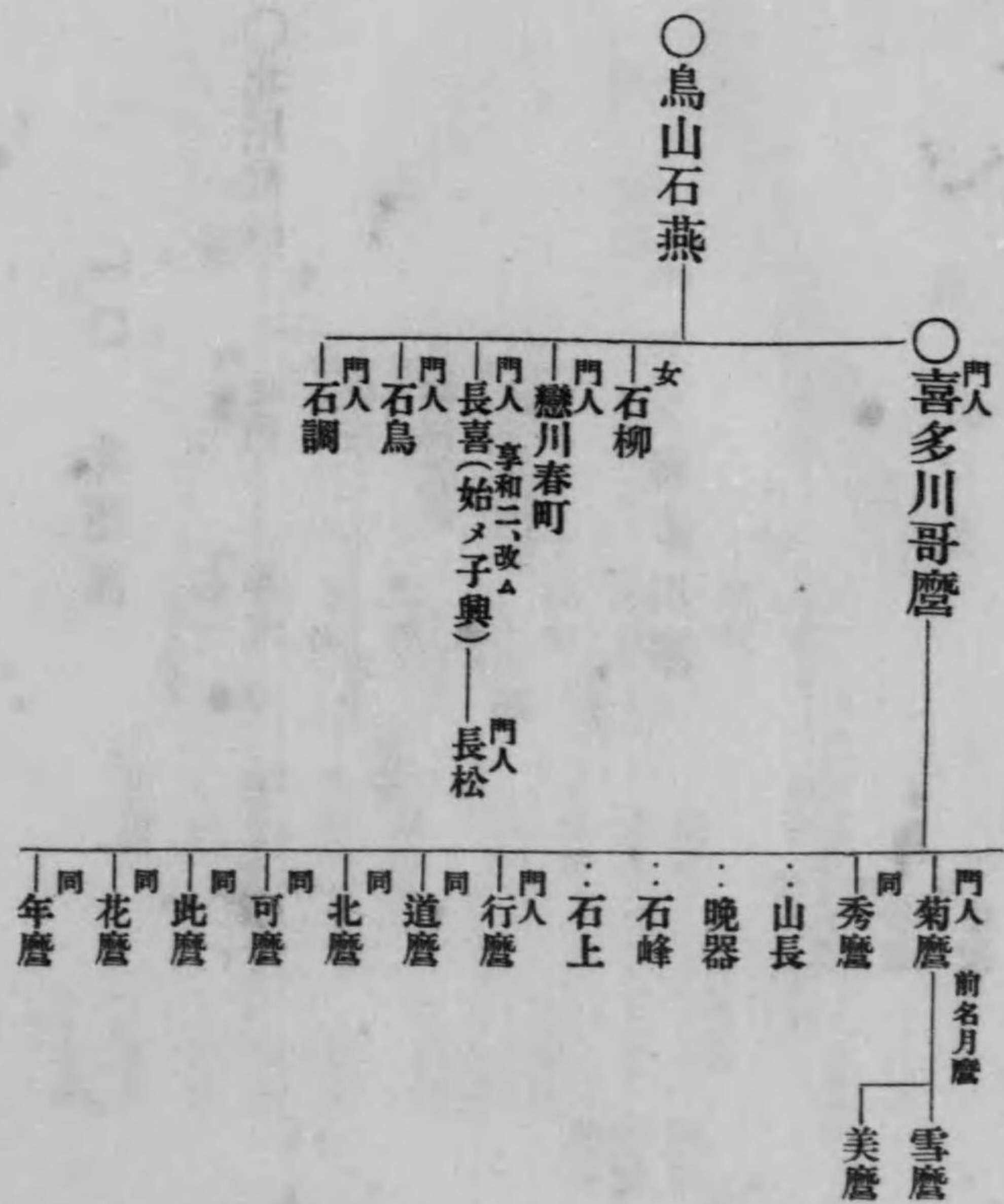
一〇 北尾派



一一 喜多川派

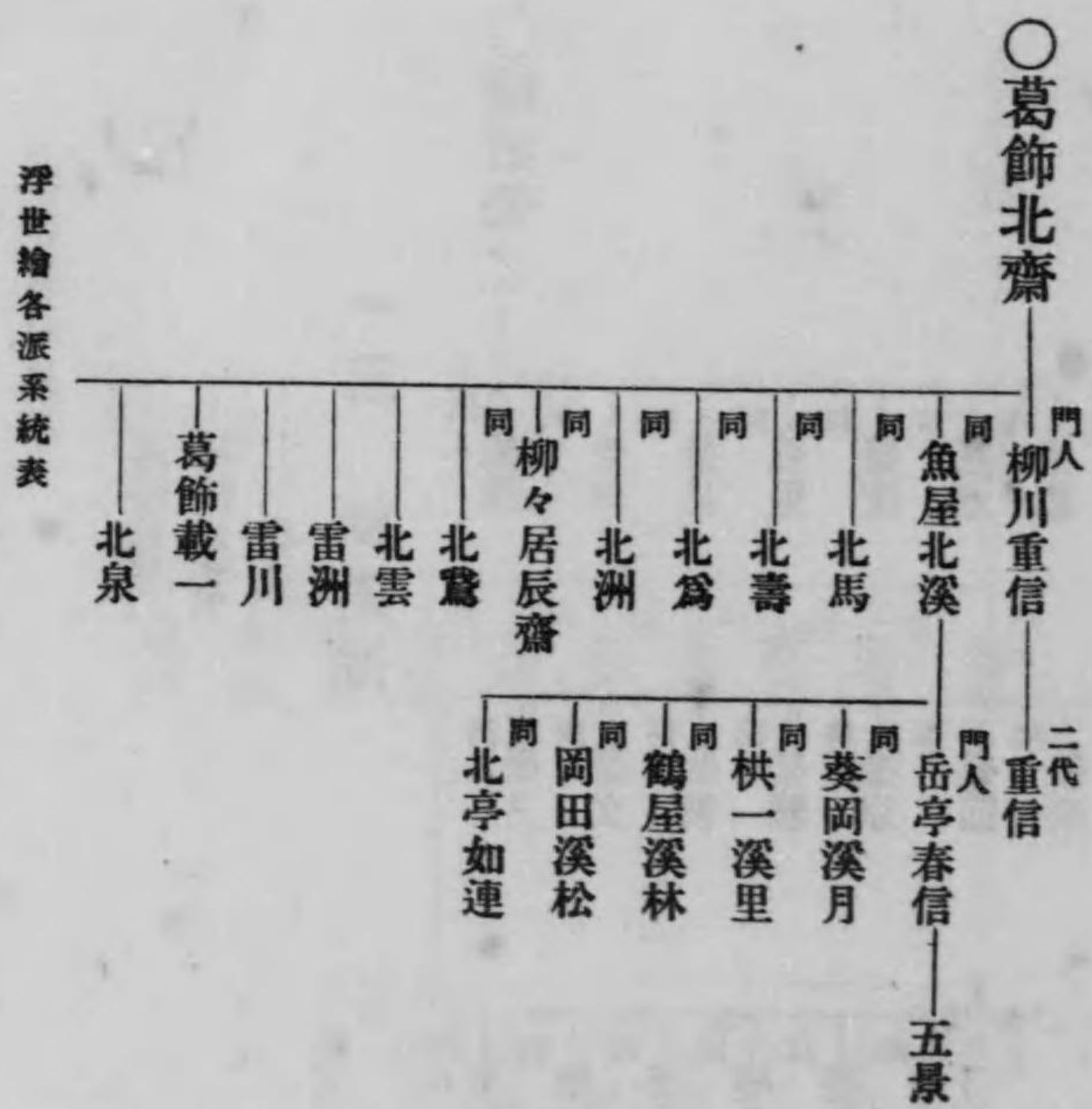


浮世繪の諸派



一一

一一一 北齋派



浮世繪各派系統表

一一三

北亭墨僊
葛飾爲齋
北廣

一三 細田派

○細田榮之

門人

榮深 榮尙 榮昌 榮里 榮礎 榮水 榮龜 榮笑

門人 榮月 榮文 榮波 榮雅 榮京 榮節 榮樹 榮甫

門人 榮暉 榮綾 榮山 榮鳥 榮興 遊女篠女

一四 菊川派

○菊川英二

男 英山

門人 英泉

同 英子 同 英章 同 英里 同 英信 同 英蝶 同 英重 同 英賀 同 英柳 同 英秀

門人 泉晁 同 英春 同 英三 同 泉壽 同 泉橘 同 泉隣 同 英笑 同 泉里

浮世繪の諸派

原 榮 著

浮世繪總說

狩野派の祖正信(享徳—延徳)の子が、彼の有名な古法眼元信(文明—永祿)であるが、當時土佐派は衰運に向ひ、光信の如き大家は居つたけれども、宋、元の畫風を加へたり、又は雪舟の手法を交へたり、或は「福富草子」の挿繪などまでも描くに至つた。光信の子光茂、光茂の子光元、光吉となると、家運は益々衰へ、光吉の門人廣通(如慶)なども「天稚彦草紙」「狹穂彦物語」「伊勢物語」等の挿繪を描いた。之に反して狩野派では、元信が土佐光信の女を娶り、光信の歿後その子光茂が幼少であつたから、後見となり、代つて繪所預に敍せられた。

これから狩野派は勢力を得、畫風も狩野、土佐兩派を融和して、一種の技巧を創めたのである。かの元信の筆になる嵯峨釋迦像縁起や、酒吞童子畫卷などを見れば、思ひ半ばに過ぎるであらう。又元信の子秀頼の高尾觀楓圖は、狩野固有の骨法を脱した一種の風俗畫と見做され、秀頼の甥長信の花下遊宴圖は、狩野派の人の手になれる浮世繪と認められ、狩野一翁の豊國大明神臨時祭圖の屏風は慶長年間に於ける風俗畫の遺品として珍重されて居る。然しこれらの畫に對しては所謂浮世繪といふ感は起らない。

この外、桃山時代頃から、狩野では山樂、探幽、土佐、住吉では光則、如慶、別派では宗達、光悅など、従來の儀式的典型的の支配を脱して、新に日本の趣味の風俗畫を描くに至つたのは、皆時代の要求である、即ち當時の英雄豪傑は、槍先の功名で一城の主ともなり、一國の領主ともなつた人々であるから、彼の東山時代の禪的茶的の減筆寫意なる墨繪を解することは出来ない。又畫家の方でも、因襲久しく弊害百出の末であるから、時様の風俗を寫せる一種の新生面を開け

る繪畫の起つたのも、當然起るべき反動の結果である。然しながら、久しく家格を重んじ、傳統を尊び來つた狩野、土佐兩家の畫家は、流石に風俗畫などに署名することは、氣恥しく思つて居たと見えて、以上に掲げた外には、落款のある風俗畫の確然たるものは甚だ稀である。そこで徳川初期頃迄の逸名の風俗畫に對しては、又兵衛筆といふ尊稱を冠せたものである。

處が、若佐又兵衛尉勝以、天正―慶安の筆で、自分の見たものは、徳川侯及び服部、高嶺兩家の珍藏にかゝる畫四五點が風俗畫なる外、他は例の川越東照宮の三十六歌仙繪額のやうな土佐風の人物畫と、高橋氏珍藏の狩野風の筆意ある山水、人物の墨繪七八點のみであるが、彼の彦根屏風と徳川侯藏の小屏風とを較べれば、どちらが善いとも悪いとも軍配の上げやうがない程である。

是に於て徳川初期前後の風俗畫は、一は又兵衛勝以即ち顯長派の筆になり、他は彦根屏風一派の畫者、即ち狩野、土佐兩派の畫家の手になつた無款のもの、の二種に分れることゝなる。要するに又兵衛は、土佐、光信末流など、署名し

て難有がるかと思ふと遺品は狩野風のもの、方が多い位であるから、後世の所謂浮世繪の開祖と仰ぐには旗幟少しく不鮮明である。

然るに、自ら大和繪師と名宣りを舉げて、旗幟堂々安房から江戸に打つて出た菱川師宣こそ、真に浮世繪の開祖というてよからう。師宣は土佐、狩野兩派の畫風を學び、先達又兵衛の手法にも倣つたものと見えて、山水、花鳥、神仙など純狩野派の筆意あるものがある。又人物の面貌形態が素朴で、顔の長い處などは、又兵衛の趣があり、賦色の豊麗な處は、土佐派の彩法と家業の經驗とから來たものだらう。師宣の子師房は世に著はれず、漸く門人古山師重によつて、師宣の畫系を繼紹して來たのであるが、師重の門人師政となると、菱川の畫風は全くなくなつて、鳥居風となつてしまつた。

師宣より十年ほど後れて世に出で、二十餘年も後れて世を去つた英一蝶は、狩野安信の門人で、後ち一種の寫實風狂畫派の泰斗として仰がれた人であるが、子孫には餘り聞えた人はなく、門人佐脇嵩之が少しく著はれたのみである。

この一蝶と前後して、系傳不明の懷月堂安度といふ畫家がある。門人も數名あるが皆同じ様な畫風で、紙中一ぱいに肥瘦甚しき描線で、美人一人立などをかいてある。飯島虛心氏はこれを額面畫法といはれて居る。鳥居清信、宮川長春、奥村政信等は、皆この懷月堂の感化を受けた人と思はれる。

鳥居派の初代清信は、始め懷月堂の手法を模し、後ち鳥居家獨得の芝居看板畫を描き創めた。それから清倍、清満を経て、清長となると畫風は一變して、春章、湖龍齋を折衷し、それに狩野風を加味したもの、如く、豊麗艶美の中に優雅高尚の情致あるものとなつた、實に鳥居中興の祖である。そしてこの清長に私淑した人々は、細田榮之、勝川春潮を始めとして、菊川英山、窪田俊滿、喜多川歌麿、北尾政演、初代豊國等である。

鳥居清信の門人といはれ、或は師傳なき獨立の繪師であるともいはれて居る二人の有名な畫家がある。一人は西村重長で、今一人は奥村政信である。重長の遺品は多く見ないから、畫風の詳細を知ることが出来ないが、政信は師

宣、懷月堂、西川祐信に加ふるに狩野風を帯びたところが見える。重長の門人には石川豊信と鈴木春信と磯田湖龍齋とあるが、就中春信は天才の筆致早く世に著はれたばかりでなく、錦繪の版畫を發明したのは、浮世繪史上没すべからざる功である。

菱川派に次いで、英、懷月堂、鳥居の諸派が起つたけれども、各々獨得の畫風を備へて居るから、少くとも菱川の流を酌んだものといへば、宮川、長春を挙げねばならぬ。長春は初め土佐派の門に入り、後ち師宣を慕ひ、中頃懷月堂に倣ひ、終に描線雄健容姿高雅な一家の畫風、宮川派を形つくつた。長春の門人には春水、長龜、正幸、一笑等があるが、春水からは憚ることがあつて、勝宮川と唱へて居つた。この春水の門人春章は役者繪が上手で、且つ嬌態の美人を描くことが巧みであるから、大に名聲を博して、春章以下を特に勝川派といふやうになつた。春章の門人から、春潮、春英、春朗（後に北齋）などが出で、春英の門人には、春亭、春扇等居たけれども、餘り世に著はれないで勝川の流は枯れた。

勝川春章より十五年後れて生れた北尾派の祖重政は、各種の繪本によつて獨習した人で、畫風も色々に變化して居る、即ち鈴木春信や、奥村政信の畫風を描き、終には自分より弱輩だけれども、當時流行した歌川や喜多川風にかぶれたこともある。この重政には、政演、政美、俊滿など、いふ門人がある。政演は即ち小説家京傳のことである。政美は晩年略畫式を創めて世に行はれた。浮世繪師で、この略畫式の三幅對は、一蝶と政美と北齋とであらう。

北尾重政から又十五年後ちに生れた喜多川歌麿は、鳥居清長の畫風を慕ひ、又重政に私淑して、艶美纖麗の美人を描くこと、古今無比である。門人には藤麿、菊麿、晚器などいふ連中が居て、善く師の畫風を繼承した。

彼の有名な葛飾北齋は、歌麿同時の人であるが、初め勝川春章の門に學び、後ち菱川師宣、俵屋宗理、北尾重政及び支那の山水畫などに則り、西洋畫法さへ參酌して、終に一家の畫風を開き、盛に健筆を揮つた。特に北齋は浮世繪師中の長壽者で、九十歳の高齡に達し、且つ身體壯健で、終生筆硯に親んで居たから、

各種の作品が今猶存在して、大に珍重されて居る。門人には北溪、北馬、北齋、辰齋、柳川重信などが居る。この北齋の畫風を慕つて更に一家を立てたものが三人ある。柳川重信に菊川英山とその門人の溪齋英泉である、と書いた本があるが、英山は菊川派の元祖英二の子で、鳥居清長や喜多川歌麿に私淑し、板刻の美人畫を描いて大に流行し、重信は北齋の聲となつて重信風を開き、英泉は各派を學んで一家を立てた。

歌川派の先祖豊春は、北尾重政と同時代の人である。初め狩野派の鶴澤探鯨に學び、後ち鳥山石燕の門人となり、又石川豊信、鈴木春信などの畫風を慕つて、美人畫も描いたが、餘り上手でなく、寧ろ浮畫式を東錦繪に應用した方が世に行はれた。豊國、豊廣はこの人の門人である。そして豊國の門人中最も有名なのが國貞、國芳で、豊廣の門からは彼の風景畫で名高い廣重が出て居る。豊國は特に役者似顔畫に得意であつたけれども、美人畫は豊廣に及ばない。然し草双紙の挿畫などは、大層かいた人である。國貞になると美人畫でも一

種の型にはまり、一風の癖はあるが、田舎源氏の挿畫などは有名なものである。廣重が西洋透視畫を應用して風景畫をかき始め、浮世繪中新に一異彩を放つたのは、人のよく知つて居るところである。

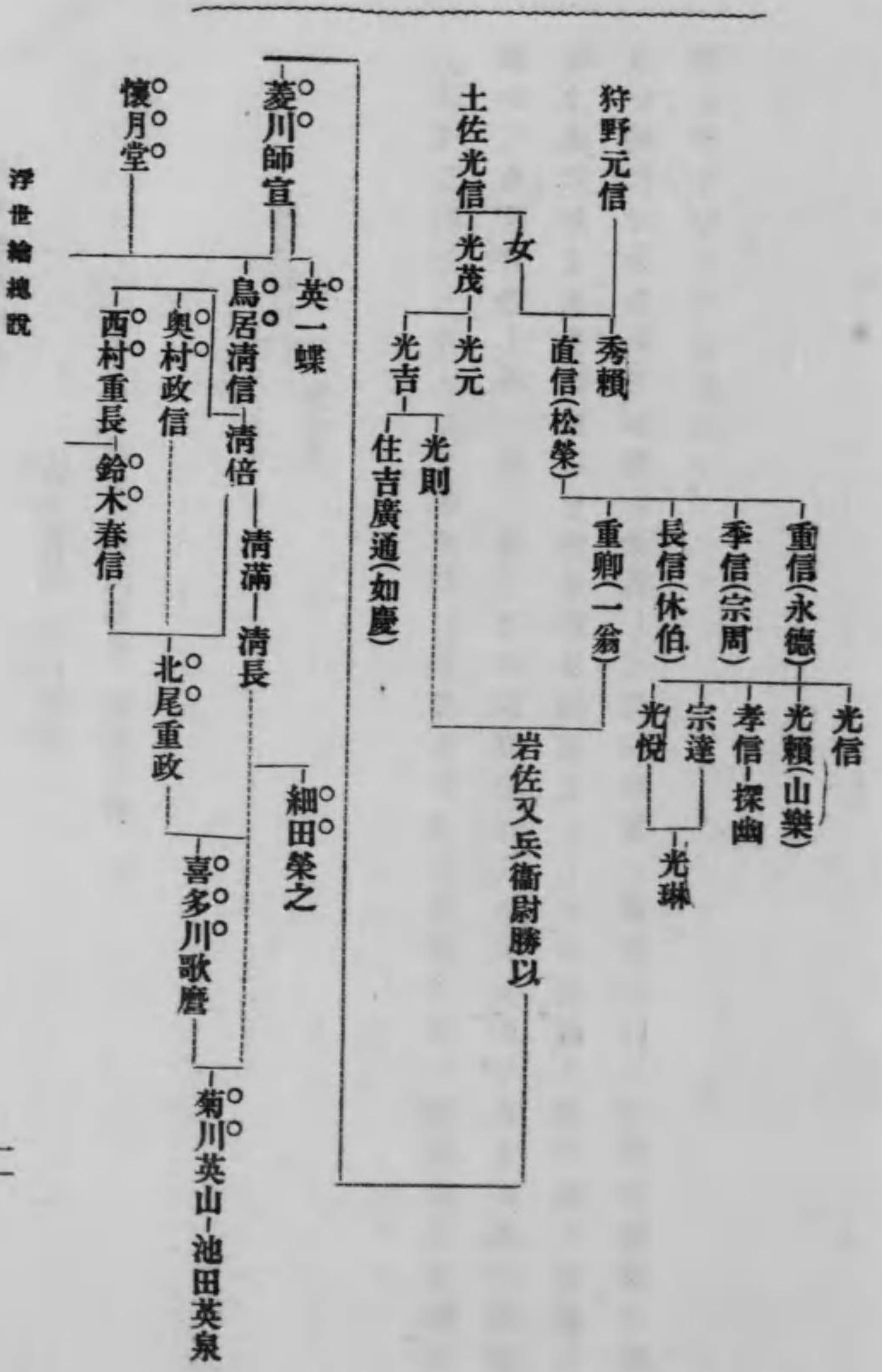
要するに、浮世繪の源は、菱川に起り、流れて鳥居、宮川の二大流となり、鳥居は西村、奥村の二流と分れ、それより更に石川、鈴木、磯田の小支流と變じ、これらの支流又合して歌川の一大流派となつたのである。宮川も亦勝川、葛飾の二流と分れて、浮世繪界に一新流派を形つくつた。この外諸流を合してなつた北尾、喜多川、菊川、細田一派と京攝地方に西川、月岡の流の蜿蜒たるものがあるのを見るばかりである。

以上述べるところによつて、浮世繪といふものが何時頃如何にして起り、如何に變遷し來つたかといふ概略を知ることが出來たであらう。元來浮世といふ意味は、憂き世の義で、伊勢物語にも「散ればこそいとゞ櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべき」など詠んであるが、漢學では「人生如浮雲」とか「浮世

如夢とかいふから、浮世の二字を用ひたり、人生と書いてうき世と訓ませたり、人間事と記してうき世のことと訓ませたりするに至つたのである。

處が、狂言記ぎんじ聲に、やい冠者、聲殿は浮世人ぢやによつて、さやうに御意なされたものぢやらうとあつて浮世人即ち當世人とか通人とかいふ意に用ひて居る。江戸時代となつてはこの意味から浮世髻、浮世楊子、浮世囊、浮世杖、浮世笠、浮世風呂などいふ言葉が出来たから、繪も當世の風俗を寫したものを浮世繪と呼ぶに至つたのであらう。彼の西鶴が大鑑に、浮世繪の名人花田内匠といへる者美筆を盡しけるとあるから、元祿の頃には既に用ひて居たものであるといふことが解る。

次の表は、又兵衛前後の土佐、狩野兩派の畫家で、浮世繪をかいた人及び師宣以後浮世繪の一派と目せられた流派相互の系統を示したものである。單線は父子師弟相承の關係、點線は只畫風に私淑したとか或は一説を表はしたものである。委しいことは本文と各派の系圖とに就いて見らるゝことを望む。



浮世繪地説

石川豊信—歌川豊春

宮川長春—春水—勝川春章—葛飾北齋

京攝地方浮世繪師

西川祐信
月岡雪鼎

さてこれから主として、各時期に於ける代表浮世繪畫家の傳記、畫系、畫蹟に就いて考證評論し、傍ら第二流以下の同期畫家にも及ぶのであるが、次の「初期」は、上述の如く又兵衛勝以を始め、浮世繪畫家としては旗幟不鮮明即ち自覺しない時代であるから、「初期」と命名して他の時期と區別したので、浮世繪萌芽時代ともいうてよからう。

初期

(寛永元、西曆一六二四—寛文二二、一六七二)

一 岩佐又兵衛尉勝以 附同勝重

藤原貞幹の「好古日録」に、又兵衛父を荒木攝津守といふ、信長公に仕へて軍功あり、公賞して攝津國を與ふ、後ち公の命に背いて自殺す、又兵衛時に二歳、乳母懷いて本願寺支院に隠れ、母家の氏を假りて岩佐と稱す、成人の後ち織田信雄に仕ふ、畫圖を好みて一家をなす、能く當時の風俗を寫すを以て、世人呼で浮世又兵衛といふ、世に又平と呼ぶは誤なり云々とあるのを、喜多村信節は覺束なしというて疑つて居るが、浮世繪類考を始めとして、この記事と同じものが多いやうである。

從來、又兵衛勝重を荒木村重の子として書いてをる書物は、畫乘要略、鑑定便

覽「丹青誌」浮世繪師便覽」を始め、浮世繪類考も新增補に至るまで皆さうである。「續本朝畫史」の如きは岩佐光輔字又兵衛世稱浮世又平などと書いてをるが、自分の藏して居る寫本、増補浮世繪類考には、又兵衛母方の氏は確井なり、村重の子といへるすといへるも實ならず、其故は又兵衛母方の氏は確井なり、村重の子といへるも誤れり、村重の孫村次の男にて村直といふ、とあつて其證にとて淺羽本荒木系圖を載せてある。「扶桑名畫傳」も同説である。

然るに、明治三十一年五、六、七月の「讀賣紙上」早稻田文學「國華誌」上等で、小原重哉、川崎茶六、林田春潮、齋藤栗堂諸氏が、又兵衛の家系や、手法に關して攻究した論文を、連載せられたとがあつたが、折節、又兵衛の後裔と稱する越前福井の岩佐平藏氏が家系を携へて出京し、川崎茶六氏に示されたその家傳の系圖といふものに據れば、村重の子は又兵衛勝[○]以[○]で、その子が勝[○]重[○]で、その又子が以[○]重[○]陽[○]雲と號した人であるといふこととなる。又兵衛の歿した(慶安三年)翌々年即ち承應元年に生れた英一蝶の自畫四季繪跋にも、近比越前の産岩佐の某とな

んいふもの、歌舞白拍子の時勢粧をおのづから寫し得て、世人浮世又平とあだ名すとあるが、又兵衛は何故越前に永住するに至つたかといふに、日本畫家大辭典に又兵衛は織田信雄の臣内膳重郷に畫を學び、後ち土佐光則に就く、寛永年中越前福井の本願寺派興宗寺の僧心願、京都本山の執務たること年餘、勝以と交り親しむ、其歸るに臨み勝以を拉し自坊に住せしむ、乃ち美人觀櫻圖、杉戸竝に屏風を畫く、勝以深く境内の閑靜を愛し、再び歸京の念なし、依て心願福井藩の家老と謀り、勝以をして福井侯に仕へしむ、寛永十五年武藏川越喜多院火あり、天海僧正の創立に係り家康の木像を安置せし處、家光再建して、その拜殿に三十六歌仙の繪額奉納の心願あり、依て當時著名なる勝以をして畫かしめんと、福井藩主松平忠昌に依頼せり、勝以命を奉し、子勝重をして跡を嗣がしめ、江戸に上りて三年にして畫成る、又再興出張吏大工頭木原木工允義久の懇誼に酬いんが爲めに、人磨像を贈る、現今東京帝國博物館の藏品たり、^{以上}摘要とあるによつて、京都から越前に移つたことや、三十六歌仙繪額の由來などが了解出

來るであらうが、その繪額の裏に、寛永拾七庚辰年六月十七日繪師土佐光信末流岩佐又兵衛尉勝以圖と明かに書いてあることが發見せられた今日では、岩佐又兵衛と勝以とは同人で、勝重は勝以の子であるといふ岩佐家々系に信を措いてよろしいのである。そして又兵衛は慶安三年六月二十二日年七十三で江戸で歿し、遺骨は福井の興宗寺に葬つてあるさうだ。さうすると、召に應じて江戸に出たのは、寛永十五年頃で、又兵衛六十二歳頃に當るから、歌仙繪額は晩年の作品となる譯である。

然らば、又兵衛の畫系如何といふに、前述の三十六歌仙繪額の裏書に、自ら土佐光信末流と明記して居るから、土佐派であるといふことは明かである。住吉家説では土佐光茂の弟子としてあるが、これは年代が合はない。「浮世繪類考」追考には、又兵衛は父村重の家來に重郷といふ人があつて、狩野松榮の門人一翁と號じた人の弟子で、後に土佐光信の畫風に倣つて、一家をなしたと書いてある。この追考の説に付いては、林田春潮氏の反對説もあり、浮世繪派畫集に

は重卿を村重の家臣重光の子としてあるが、荒木村重は、荒木略記「茶人系傳全集」扶桑名畫傳「安土桃山時代史等の説を參酌して考いて見れば、花隈城陥落の後剃髮して道薫子又兵衛勝以は道瀧と號すと號じ、茶事三昧に餘生を送り、天正十四年に至つて死し、重郷(號一翁)は元和二年に四十七歳で歿した人であるから、又兵衛三十八歳の時に當る、又兵衛は一翁に師事したといはれぬこともあるまい。

この外、名畫拾遺には、勝以道蘊能畫故事人物歌仙等、非土佐氏之法而爲一體とあり。「本朝畫纂」には、善畫大和繪有奇趣三十六歌仙及保元平治物語傳于世とも見え、畫乘要略には、土佐光則の門人としてあるが、光則は又兵衛より五年も後れて生れ、十二年も前に死んだ人である。川崎千虎氏は、又兵衛は土佐では光吉、光則の父慶長一八、歿年七五、狩野では光信(慶長一三、歿年四八)などに師事したものだらうといはれて居る。又、星岳畫集には、職人畫繪を擧げて、人物の描法は、土佐風にあらざり、狩野風にあらざりして、岩佐勝以等の畫風の由りて來

るべき系統に屬し云々などと書いてある。以上の如く畫系に付ては、種々の説があつて一定して居らないが、又兵衛勝以は土佐狩野兩派を學んだ人であることは、その遺作品を見ればよく解る、即ち勝以の筆には、(一)土佐風のものと、(二)狩野風のもの、(三)浮世人物を畫いたものとある。從來は、彦根屏風の如き無落款の浮世風俗畫一切を、又兵衛といふたものであるが、今日では又兵衛勝以の筆は、歌仙繪額を標準として、他の無落款の浮世風俗畫、即ち狩野、土佐兩派の匿名畫家の手になれるもの(假りに、傳云又兵衛筆)と命名して置く)と區別して居る。

終りに畫蹟に付いて一言して置かう。(一)彼の有名な川越喜多院の三十六歌仙繪額は、土佐風で各人物の性格もよく表はれ、賦彩も落付て居るが、願が極めて長い特徴があるから、願長派などというて、他の無款の風俗畫と識別する目標となつて居る。この繪額全體は、木版として、星岳畫集に載つて居るし、喜多院發行の繪端書もある、又全體ではないが、眞美大觀及び浮世繪畫集にも載

つて居る。藤懸靜也氏は、國民文學第一卷第一號に、後三年繪卷を見るとそのうちに描かれてゐる武士の顔は何れも頰の長い頬の豊かな云々と書かれて居るがよい御氣付きであると至極御同感である。(二)狩野風のもの、高橋是清氏藏の羅浮仙圖、紀貫之畫像、老子過關圖以上、眞美大觀第十二册所載、鍋倉直氏藏の古廟秋色圖、轎車觀菊圖以上、同上、第十四册、及び三崎敦氏藏の耳垢取圖以上、同上、第十七册、などで、碧勝宮圖といふ文字ある一小角印あるものばかりであるが、只紀貫之畫像に、印上に勝以書之と落款があるので、又兵衛勝以の筆であるといふことが解つたのである。以上の畫圖は多く墨畫で、描法も雄健に狩野派としても名手たることが分る。(三)又兵衛の浮世繪としては、服部一三氏藏の士女遊戯圖、群舞圖及び高嶺秀夫氏藏の男女遊樂圖二枚以上、浮世繪畫集第一册所載などで小角印内に道、蘊、大角印又は大丸印内に勝以の文字があるばかりで落款はない。

以上三種の畫蹟は又兵衛勝以の落款或は款印ある諸作で、又兵衛の畫風手法を研究するによい材料であるが、次に無落款の風俗畫所謂傳云、又兵衛筆と

稱せられて居つたものを列記して、兩者間の區別を識る便りとしよう。

- 一、彦根屏風 井伊直忠伯藏 浮世繪派畫集 第一册
- 二、名古屋離宮内御張付(船卸圖、造家圖、射的圖) 同
- 三、婦女遊樂圖屏風 松浦伯藏 同
- 四、美人少女圖 津輕伯藏 同
- 五、男女群舞圖 大澤久右衛門氏藏 同
- 六、舞伎圖 高嶺秀夫氏藏 同
- 七、洛外圖 片野邑平氏藏 同
- 八、風俗畫 伊達伯藏 美術世界卷廿一
- 九、調馬圖屏風 醍醐寺藏 浮世繪派畫集 第一册
- 一〇、相應寺屏風 尾州徳川家藏 同
- 一一、歌舞伎雙紙 同 上 浮世繪畫集 第一輯

- 一二、伊勢物語圖 原六郎氏藏 浮世繪畫集 國華 七一號
- 一三、小町圖 同 一六號
- 一四、琴邊官娃圖 同 一號
- 一五、美人圖 同 一六號
- 一六、春遊圖 日本美術畫報 初篇卷四、
- 一七、美人舞蹈圖 二册 池田侯藏
- 一八、小栗繪卷十五卷 畫帖 名古屋、政秀寺藏
- 一九、若衆歌舞伎圖 尾州徳川家藏 浮世繪派畫集 第一册
- 二〇、風俗屏風 名古屋城本丸 眞美大觀 第十三册
- 二一、競馬圖 淺見又藏氏藏 國華 二六九號
- 二二、山王、加茂祭圖屏風 〔村山龍平氏藏二卷 古森梅太郎氏藏一卷〕
- 二三、堀江物語 三卷

右傳云又兵衛畫の中で、二、九、十、十一、十二、二十は狩野派で筆者不詳のもの。三、五は流派筆者とも不詳のもの。四、八は彦根屏風の手法に近きもの。六、七は土佐派で筆者不詳のもの。一は有名な彦根屏風で、人物は山樂の風致に似、山水は古法眼初期の韻致を帯びて居るといふ評がある。十三は川崎千虎氏は又兵衛の眞蹟と断定し、國華には狩野山樂か或は其衣鉢を受けたものといふ説と又兵衛なるべしといふ説二つを擧げて居る。十四は勝以風に近きところあり。十五は彩法、十六は衣紋の描法、十七は面貌少しく彦根屏風と違ふとは川崎千虎氏の説。二十二は男女の面貌、姿態例の願長派に屬し、配景は狩野、土佐風を帯び疑もなく又兵衛筆と思はる。二十三是馬上の大將と乳母の面貌が、稍又兵衛風に見えるばかりで、其他の武者は面貌皆同型で、横平たく口を開いて居る、土佐風も狩野風も見える。

以上擧げ來つた又兵衛及び傳云又兵衛畫の題目を見ればかりでも、徳川初

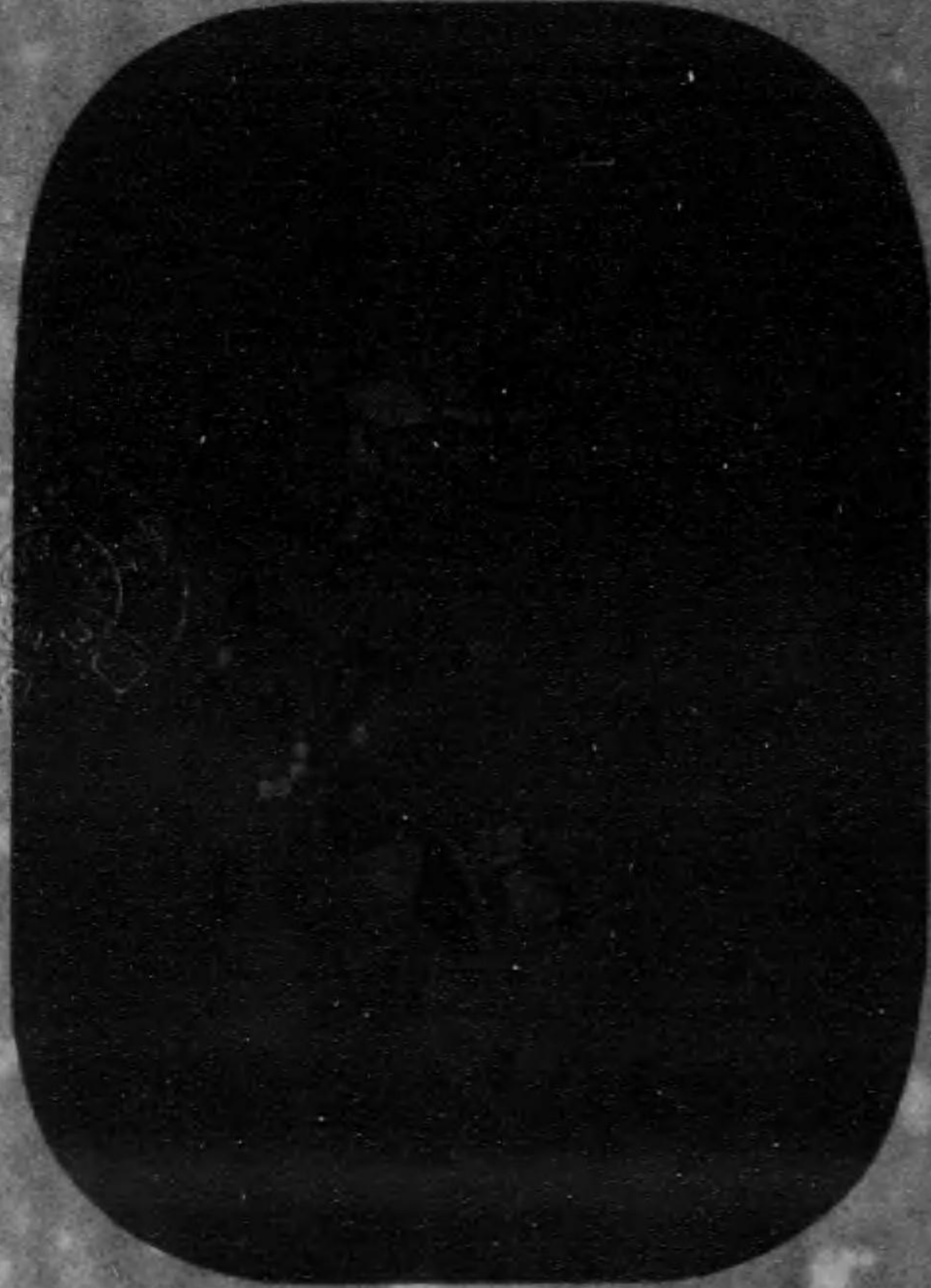
期の浮世繪の構圖は明治四十四年七月の「國華誌」上藤懸靜也氏が論ぜられた如く、(一)活世界の複雑なる状態を巧みに一圖に整へたものや(二)構圖の雄大なることや(三)繪卷物的傾向を帯びて居ることや(四)個人を題材として構圖して居ることなどがよく解るであらう。

岩佐勝重

又兵衛勝以の子勝重は、福井新屋敷町で生れ、延寶元年二月二十日歿したことは解つて居るが享年は不明である。父が家光將軍の命を奉じて、彼の歌仙繪額を畫くべく江戸に上つた後、父の跡を嗣いで、藩主松平光通に仕へたことは、既に述べた如くである。畫は父に學んで、浮世繪も狩野風のも畫いたが、父には及ばなかつた。寛文九年福井城焼けて後、再築の時、鶴ノ間の壁障に群鶴圖を畫いたといふことである。その外、眞美大觀第十三冊には狩野風

の水墨畫猿猴蘆雁圖が載つて居る。又浮世繪派畫集第一冊に男女遊戯圖と美人若衆圖とが載つて居るが前者は二重ぶちの圓印一つ捺してあるばかりで婦人の面相は父勝以と違つて鼻高く尖つて見憎くある。後者も一小角印を捺してあるばかりであるが顔に丸みがあつて比較の見よい。然し父の畫風とは矢張違つて寧ろ松浦伯藏の婦女遊樂圖屏風(浮世繪派畫集第一冊)の人物の面貌と似寄て居る。

「國華第廿六編第二冊大正四年八月に岩佐又兵衛自畫の肖像なるものは世に其略寫を傳へたれど、原本の所在久しく不明に屬したり、然るに近頃その原本は享保十六年の奥書ある家系の記録及一通の書簡と共に樫尾氏の所有する所なることを知るに至れり、とて肖像を木版に書簡を網版にして掲載してある、委しくは同誌上瀧精一氏の「岩佐又兵衛自畫像に就いて」といふ記事を見るがよい。

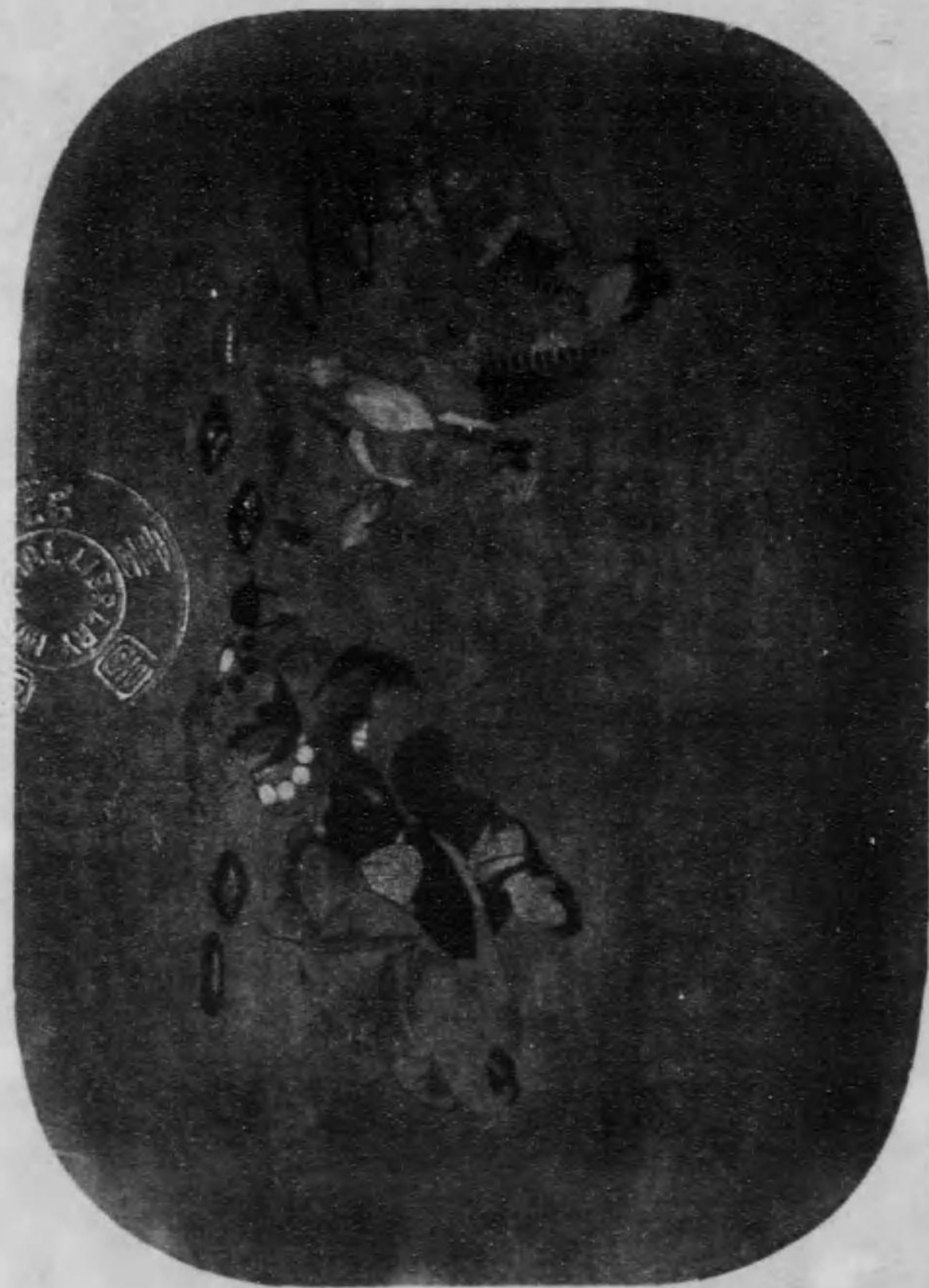


男女遊樂圖 岩佐又兵衛自畫以筆

浮世繪派畫集所載

の水墨畫猿猴蘆雁圖が載つて居る。又浮世繪派畫集第一冊に男女遊戯圖と美人若衆圖とが載つて居るが、前者は二重ふちの圓印一つ捺してあるばかりで、婦人の面相は父勝以と違つて、鼻高く尖つて見憎くある。後者も一小角印を捺してあるばかりであるが、顔に丸みがあつて、比較的見よい。然し父の畫風とは矢張違つて、寧ろ松浦伯藏の婦女遊樂圖屏風(浮世繪派畫集第一冊)の人物の面貌と似寄て居る。

「國華第廿六編第二冊大正四年八月に、岩佐又兵衛自畫の肖像なるものは、世に其略寫を傳へたれど、原本の所在久しく不明に屬したり、然るに近頃その原本は享保十六年の奥書ある家系の記録及一通の書簡と共に樫尾氏の所有する所なることを知るに至れり、とて肖像を木版に書簡を網版にして掲載してある、委しくは同誌上瀧精一氏の「岩佐又兵衛自畫像に就いて」といふ記事を見るがよし。



男女遊樂圖 岩佐又兵衛勝以筆

浮世繪派畫集所載

二 又兵衛前後の浮世繪諸家

岩佐又兵衛より五十年も後れて生れ、自ら大和繪師と名のつて、浮世繪の一生面を開いたものは、總説にも述べてある如く、菱川師宣である。が、この師宣の壯年時代、即ち寛文より以前に於て、又兵衛と前後して、浮世繪に筆を執つた、土佐狩野其他のものは、

狩野一翁、 狩野長信、 土佐光則、 住吉如慶、 狩野探幽、

北村忠兵衛、 山本理兵衛、 辻村茂兵衛、 菱川孫兵衛、 海北忠左衛門、

花田内匠、 野々口立圃、

等で、これらの人々の中、一翁、長信、光則、如慶、探幽に關しては、總説や又兵衛傳記

中に述べて置いたが、北村、山本、辻村の畫蹟は、扁額軌範に見え、菱川孫兵衛は近江八幡町日觸八幡社の西村船獻額に、海北忠左衛門は京都清水寺の頼政怪鳥を射る圖の扁額に筆蹟を残して居る位で、傳歴は詳しく解らない。花田内匠は、西鶴が「男色大鑑」卷五に、浮世繪の名人と書かれてあるのを知つて居るばかりで、遺品に接したことがない。残る一人の野々口立圃は浮世繪畫家としては、江戸に於ける岩佐又兵衛に正敵する譯にはいくまいが、人形師として、俳人として、歌人として、書家として頗る多才多藝の人で、世人もよく知つてゐるから、又兵衛時代に於ける京都の浮世繪師として少しく述べて置かう。

立圃は、丹波保津の人であるが、京都に出て、難入形を商つて生業として居つたから、通稱を難屋というた。(人形師永徳齋は立圃の子孫だといふことである。)名は親重、松齋と號じ、書は尊朝親王に、歌は烏丸光廣に、俳諧は松永貞徳に學んだ。さて畫は、尾形流略印譜には、俵屋宗達の門人とあり、俳家奇人談には、探幽の弟子とあり、扶桑名畫傳には、土佐風を畫くとあるが、いかにもこれらの

筆意を玩味して、一種の畫風を創めたものであらう。高嶺家藏の士女娛遊圖所載 浮世繪畫集は立圃の肉筆で筆致優麗、賦色淡泊なるよい標本である。又、和漢

名畫苑卷六雜諸流の部には立圃の筆として福宣、福神すまふ、大黒、惠比壽、象の圖などを載せてあるが、いづれも筆法輕快である。彼の「京雀」おさな源氏の挿畫は、歴代滑稽傳「嬉遊笑覽」浮世繪類考等皆立圃の筆として居るが、此花記者は同誌第十九號で、以上の二書を、江戸雀の挿畫と較べて見ると、筆勢といひ、姿態といひ、配置といひ、全く同一であるから、師宣の筆であること疑ないと斷定して居る。この外、畫史會要「雛本古筆繪鑑」好古類纂などに立圃の畫を模出したものがあり、中川喜雲作の草双紙の挿畫は、多く立圃の筆になつたものとしてある。

立圃の歿年は、大概の本に寛文九年九月七十一歳とあるが、名人忌辰錄には延寶九年九月三十日七十、一歳とあるから、洛東鳥部山にある墓碑を見たら、いづれが正しいか、解るだらうと思つて、京都の友人に問ひ合せたところ、今は

墓石も過去帳もないさうだが、この立圃の歿年を寛文九年で七十一歳であつたとすれば、彼の浮世繪を畫いた住吉如慶の生歿年は全く立圃と同じである。

三 大津繪と又平

大津繪といへば、誰も繪表具にした佛畫や、塗笠きて藤花かたげた藤娘や、鬼が撞木や奉加帳持つた繪である。と點頭であらうが、この繪の畫者は又兵衛であるといひならはしてゐるから、一言して置かうと思ふのである。大津繪は追分繪とも大谷繪ともいつて、近江の大津や追分、大谷邊の路傍で、所謂御上りさんの田舎客を相手に賣り出した一種の略畫で、而かも多くは佛畫であつたやうだ。彼の元祿三年板東海道分間繪圖に、大津大谷邊佛畫いろく

ありと記し、芭蕉の句に、大津繪の筆のはじめは何佛とあり、又元祿十六年印行の俳諧日本國に、追分の繪佛に後世を打任せ、大津繪に回向して行く鉢叩などの句を見ても解るであらう。然し、天和二年の西鶴の好色一代男卷三に、屏風の押繪を見れば、花かたげて吉野參の人形、板木押の弘法大師、鼠の嫁入、鎌倉團右衛門、多門庄左衛門が連奴、これみな大津追分にてかきしものぞかし、見るに都なつかしく思ふ云々とあるから、天和頃には既に役者繪なども書いたものらしく、又嬉遊笑覽の中に引いてある、似我峠物語に、上町の友達より合て、初心連歌の會をして遊ばんとて、先づ床には大津、栗田口の道にて賣る天神の御影をひつぱり、竹の筒に花を生け、かはらけに抹香をふすべける」とあるから、京の栗田口邊でも畫き、且つ天神像なども描いたものらしい。それから、大津繪の戲畫の數々を詠み列べたものに節附した二上りの大津繪節の中に、外法梯子剃り、雷錨で太鼓を釣上る、お若衆が鷹を据え、ぬり笠お山は藤娘、座頭の禪を犬わんく、吠へてびつくり仰天し、遊て、杖をふり上る、荒氣の鬼も發起して鉦

撞木、瓢箪、鯉をおさへましよ、奴の槍持、鐘辨慶、矢の根五郎など、見えて居る如く、大津繪の題材はだん／＼擴つたのである。

さてこの大津繪は、何時頃誰が畫き始めたものかといふに、嬉遊笑覽卷三畫の部に、大津繪は、傳へて岩佐又兵衛が畫き始めたりとて、それが子孫めかして、又平久吉など、落款したる畫もあり、慥かならぬことなり、其畫法は信貴山玉藏院に、明兆が地藏菩薩の繪を、繪表具にして十戒圖をかきたるは、海北忠左衛門、藤原某とかあり、これ今の、大津繪にひとし、清水寺の額に頼政が怪鳥を射たる圖はこの海北忠左衛門が筆なり、寛永十二年乙亥六月吉日と識したり、又畫者の名は知らず、奴の番椒を肴にして、酒を大杯にて飲むところをかきたる上の方に、當時の小歌を書きたるは、正しく光廣卿の書なりといふ、古きすまふの畫法なりあり鬼の念佛、ひさごもて、鯉押る圖等のことは、雜考の中にいひたりとあるが、大津繪の始めは、この海北忠左衛門などが畫き始めたものとすれば、寛永十二年とあるから、時代は岩佐又兵衛頃である。そしてこの頃から、無名畫家の

大津繪的の略畫があつたことも解るが、その畫家は、又兵衛前後の浮世繪諸家の條に述べて置いた、北村、山本、辻村、菱川、花田などいふ人々の手になつたものではあるまいか。岩佐又兵衛とても、京都在住の頃は畫いたかも知れない。兎に角、大津繪を畫き始めた人は、岩佐又兵衛ではないとしたところが、享保四年に近松が、傾城反魂香といふ戯曲を書いて、中に土佐の末弟浮世又平重起といふもの、大津に住んで繪をかい居たといふことを記し、その後、式亭三馬作國貞畫の、吃又平大津土産名畫助太刀八樓川慈悲成作國丸畫の、即席大津繪三式亭小三馬作貞重畫の、浮世又平名畫譽四冊などいふ小説が世に出たから、廣く世にも知られて、大津繪といへば又兵衛の筆と思ふやうになつたのであらう。勿論、英一蝶の自畫四季繪跋に、近比、越前の産岩佐の某となんいふもの、歌舞白拍子の時勢粧をおのづから寫し得て、世人浮世又平とあだ名すとあり、享保三年版の支考の、本朝文鑑には、浮世又兵衛は大津繪の元祖とあるから、近松の戯曲以前から、大津繪の元祖は、浮世又兵衛であるといふことだけは、傳はつ

て居たやうだ。又京都富岡鐵齋氏藏幅の中に、土佐又平治と落款のあるものがあるとのこと、近世奇跡考には又平久吉といふのが見え、浮世繪師便覧には「三合一覽」を引いて、元祿頃京師の人で、當世繪又兵衛一に又平といふのが見えて居る。これは元祿五年版の「京都細見」にも見えて居るから、元祿頃に又平といふ畫者が京都邊に居たに相違はない。然し、岩佐又兵衛とは時代も違ふから、勿論別人であることは明かである。

要するに、大津繪は寛永頃からあつたものだらうが、當時は大津繪の佛を、持佛堂にかける人が多かつたから、自然佛繪の方が多くて、戲畫は片手間仕事であつたやうである。然るに大津繪の題材が多くなり、範圍が擴まつて、後には戲畫の方が盛んに世に行はれたやうであるが、寶永五年印本「本朝諸士百家記」卷八に、大阪長町七丁目に團扇屋善三郎といふ者あり、此者の裏店に鼠關とかやいへる七十餘の老法師あり、略中間半ばかりの棚を釣て、大津繪の三尊をかけ、一首の讀に、繪にかくも木にきざめるも彌陀は彌陀未來の事はかつてたのま

ぬとある如く、寶永の頃までは、大津繪の佛様は、民間の持佛堂で見ることが出来たのである。處がこの大津繪は始めこそ師宣が一枚摺の版を出すに與て力があつたらうが、明和頃から彩色摺も發達して、錦繪といはるゝ位、浮世繪全盛の世となつたから、大津繪などは顧るものがなくなつたのであらう、天明版の黄表紙、江戸土産大津名物の作者可笑が、大津繪の鬼の念佛の鬼が、久しく店頭に晒れて居る辛さに、堪へきれず江戸に逃げ出したことを題材に採つたのを見て、も當時大津繪の地位が思ひやられる。今では大津繪の佛畫は殆んど全く掛けて置く家は見受けないし、店頭でも戲畫の鬼の念佛などが稀に見えらるばかりで、只前に記した「外法楷子刺り云々」の大津繪節の替唄忠臣藏五段目の「お、い、親仁どの梅川忠兵衛の、大阪を立退いて」などに、大津繪の名を殘してあるばかりである。

四 版畫、版本の種類 其一

元和假武後、家康は文教獎勵の爲め、和漢古書の搜索、刊行、書寫などの事業を起したが、當時銅活字が九萬、木活字が數十萬あつたといふことである。この木活字を使つて印刷したものは、我國翻譯小説の元祖といはれてをる慶長板の「伊曾保物語」を始めとして、昨日は今日の物語「仁勢物語」などあつて、稀には挿畫のあるものもある。彼の慶長十三年角倉素庵「了以の子」の開板にかゝる「伊勢物語」は墨摺ではあるけれども、我邦で挿畫入假名本の始めである。自分も一本を藏して居るが、繪は土佐風書は光悦風、紙は蕨紙やうのもので、處々に薄紅、薄青の紙が交じつて居るなど、各方面から見てもおもしろい本である。委しくは、日本古刻書史などを見るがよい。

次に元和元年五月大坂落城に際し、急速に其の事實を繪に表はして、市中を

讀賣した瓦版とて、一枚物の出版物があることを、木版浮世繪大家畫集の中に記してある。又、同畫集中に、版畫が時事問題の説明にまで用ひらるゝ程であるから、宗教上の用品として使用せられたのはいふまでもないことである。とて來迎佛の版畫に筆彩したものを載せて居る。自分も寛文四年の版畫日蓮上人の繪像を、丹と綠青で筆彩したものを藏して居るが、版本でも上述の木活字本や「伊勢物語」と違へ、墨摺版本に筆彩した繪どり本といふものがある。これは足利時代の寫本の古草紙を雕刻した幼稚な物語や、儒佛趣味の隨筆的物語などを多く假名で書きあらはしたもので、挿畫を丹と綠青で彩つた木版本であるから、丹綠本とも呼ばれて居る。勿論丹綠本というても丹と綠青ばかりでなく、この外に藍、紫、黄、胡粉などを用いたものもある。「木版浮世繪大家畫集」には丹綠本「住吉物語」佐々氏の「近世國文學史」には「辨慶物語」の挿畫を轉載して居る。

さてこの丹綠本格的の繪入淨瑠璃本がある。それはかの柳亭種彦の「用捨箱」

に、寛永八年卯月じやうるりや喜衛門開板の説教かるかやの一部と、同十六年正月上るりや二條通御幸町西へ入喜右衛門開板の山城國住人六字南無右衛門正本やしまの一部とを載せてあるが、前者の挿畫は土佐風、後者のはこの頃に見る一種の稚氣を帯びた粗雑な繪である。文字は大概假名で、細かに書いて居るから、虱本ともいふ。これで見ると、繪入淨瑠璃本といふものは、遅くも寛永の始め頃からあつたものであらう。

要するに、初期即ち寛文以前の版畫版本は、墨摺木版か或は墨摺木版に筆彩を施した丹緑本の如きものばかりで、色摺の發明はまだ無かつた時である。そして畫家の名は記してないが、多くの繪入版本などを見ればこの期の畫風を會得するによからうと思ふから、次にこの期に屬する繪入板本の見易きものを上段に列記し、二段に出版年月、三段に轉載書目を擧げて置く。なほ、日本小説年表などに據つて書目を調べ、廣く比較研究せらるゝことを望む。

- | | | |
|-------------|-------|-------------|
| 一、伊勢物語(角倉本) | 慶長十三、 | |
| 二、説教かるかや | 寛永八 | 「用捨箱」 |
| 三、七人比丘尼 | 寛永十二、 | 「近世女風俗考」 |
| 四、やしま | 寛永十六、 | 「用捨箱」 |
| 五、曾我物語 | 正保 | |
| 六、なくさみ草 | 慶安 | |
| 七、犬つれく | 承應二、 | 雜誌「此花」 |
| 八、七十一番職人畫 | 明暦三、 | 「近世女風俗考」此花」 |
| 九、九相詩 | 明暦頃 | 「此花」 |
| 一〇、一休ばなし | 明暦頃 | 「骨董集」下 |
| 一一、強盜鬼神 | 明暦頃 | |
| 一二、可笑記 | 萬治二、 | |
| 一三、宇治拾遺物語 | 萬治二、 | |

浮世繪の諸派

- 一四、私可多咄 萬治二、
「骨董集」上
- 一五、日本詩仙 萬治二、
「此花」
- 一六、京童 萬治元、
- 一七、伊曾保物語 萬治二、
「列傳傳小説史」
- 一八、東海道名所記 萬治
- 一九、武藏鏡 萬治
- 二〇、江戸名所記 寛文二、
「骨董集」中
- 二一、要石 寛文二、
同上
- 二二、京雀 寛文五、
「近世女風俗考」聲曲類纂
- 二三、繪入法妙童子 寛文五、
- 二四、新撰雛形 寛文六、
「骨董集」中
- 二五、訓蒙圖彙 寛文六、
「聲曲類纂」
- 二六、阿彌陀本地 寛文七、
「近世女風俗考」

二七、水鳥記

寛文七、

「骨董集」中

二八、をさな源氏

寛文十、

二九、十帖源氏

寛文十、

三〇、家内幸藏

寛文十一、

三一、吉原草紙

寛文十二、

三二、曾呂利狂歌話

寛文十二、

三三、本朝女鑑

寛文

第一期

(延寶元 西曆一六七三 — 正徳五 一七一五)

—— 菱川派、英派、懷月堂派、鳥居派 ——

概 説

この期を延寶元年から始めたのは、代表畫家菱川師宣の遺品で、年號も明確である淺草田甫圖(肉筆)と、武家百人一首(版本)とが寛文十二年に出来たのであるから、其以前にも師宣の筆といひ傳へるものがないでもないが、不確實であるからかく定めたのである。寛文は十二年で終り、次の延寶元年には師宣既に生國安房から江戸に出て來て居つたと思はれる。師宣は、狩野や土佐に又兵衛の畫風を加味して、浮世繪の一生面を開き、男師房はよく父の畫風を受け繼いだ、門人師重の弟子師政に至つて、菱川派は一變して鳥居風となつた。

延寶元年に二十二歳の英一蝶は、寛文六年十五歳の時江戸に上り、狩野安信

の門人となり後ち破門せられたが、岩佐、菱川の流をも酌み、一種の輕快洒落な浮世繪を畫き英派を創めた。子にあらはれたものなく、門人佐脇嵩之によつて、英派は繼續されたのである。この一蝶の筆致を採つて、更に描線の肥度甚しく、賦色の壯麗な、面相の豊滿な美人を描いたのが懷月堂である。鳥居清信が、鳥居派獨特の看板畫法を創めたのも、この懷月堂に負ふところ多く、次期の宮川長春、奥村政信なども皆この影響を受けたやうである。以上の菱川師宣、英一蝶、懷月堂、鳥居清信の四人を、第一期の代表畫家と定め、次にこれらの傳記、畫系、畫蹟などに就いて評論することゝした。

此期は、肉筆ものは師宣の濃艶な色彩を施したものがあつたけれども、版畫版本となると墨摺ばかりで、色摺はまだ出來ない頃である。然し丹繪、漆繪などいふ墨摺繪の上に丹、黃、紅などを筆彩したものはあつた。

一 菱川師宣

又兵衛歿後、自ら日本繪師とか大和繪師とか名のつて、浮世繪の一生面を開いた者は、師宣であることは、前に述べた通りである。この師宣の家は今も房州保田に傳はつて、田中某といひ漁業に従事して居る。又保田の北二里ばかり、上總國君津郡竹岡村字百首の松翁院(十夜寺トモ)に、高さ八尺横十二尺許の釋迦涅槃圖を縫箔にした大幅があつて、圖の左方に、縫物屋房州平群郡保田住菱川左衛門尉觀室道性六十二才時奉還之者也と書いてあつた、と國華誌上(九三)濱田青陵氏の記事に見えて居るが、この道性と師宣との關係は分らぬ。元來師宣は房州平群郡保田村の人で、代々紺屋を業とし、父道茂は縫箔に巧みであつたが、師宣に至つて江戸に來たのは、どんな動機からであるか詳しくは分らぬ。山東京傳の浮世繪類考追考には、菱川師宣若年の時江戸に來り、始めは縫箔

を以て業とし、上繪といふものより畫をかきならひて後ち一家をなせり」とあり、俳諧師雀菴の筆記には、師宣幼き時より繪を好み、浮世又兵衛に繪を求めて、其筆意に倣ひ、専ら時世の姿を畫き、遂に一家をなせり、又同筆記に、天和四年板大和繪畫の奥書に、房州菱川吉兵衛尉筆跡云々とあれば、此頃菱川氏は猶房州にありしならんなどあるを、飯島虛心氏は曾て讀賣紙上で、以上二書の說に對し、確證ありていふのではなく、一時の臆說だらうといひ、更に師宣が印行の繪本類は、天和元年の頃より三年四年に至り、漸次盛んに世に行はれ、天和三年板の俳書みなし栗に山城の吉彌結びも松にこそ其角菱川やうの吾妻俤嵐雪などありて、此の頃かく世に知られたるを以て察すれば、蓋し天和以前延寶年間既に江戸に住し、獨立して浮世繪師と稱せしものならん」と論ぜられたことがある。

が、自分の考では、追考の說は同人著の「搜奇録」卷一に「葆真齋維民の菱川師宣家譜を載せてあるが、其の中に、縫箔下繪を書き候て一流の畫かき覺え候由承

東京市立博物館蔵



菱川師宣筆 三田氏蔵

を以て業とし、上繪といふものより畫をかきならびて後ち一家をなせり」とあり、俳諧師雀菴の筆記には「師宣幼き時より繪を好み、浮世又兵衛に繪を求めて、其筆意に倣ひ、専ら時世の姿を畫き、遂に一家をなせり」又同筆記に「天和四年板大和繪盡の奥書に房州菱川吉兵衛尉筆跡云々とあれば此頃菱川氏は猶房州にありしならん」などあるを、飯島虚心氏は曾て讀賣紙上で、以上二書の說に對し、確證ありていふのではなく、一時の臆說だらうといひ、更に「師宣が印行の繪本類は、天和元年の頃より三年四年に至り、漸次盛んに世に行はれ、天和三年板の俳書みなし栗に山城の吉彌結びも松にこそ其角菱川やうの吾妻俤嵐雪などありて、此の頃かく世に知られたるを以て察すれば、蓋し天和以前延寶年間既に江戸に住し、獨立して浮世繪師と稱せしものならん」と論ぜられたことがある。

が、自分の考では、追考の說は同人著の「搜奇録」卷一に「葆真齋維民の菱川師宣家譜を載せてあるが、其の中に、縫箔下繪を書き候て一流の畫かき覺え候由承

東京帝室博物館藏



濱劇開田三圖 菱川師宣筆

傳候とあるに據つたものであらうと思ふ、又師宣は遅くも寛文には江戸に来て居たものと思ふのである。といふのは、東京博物館藏の演劇二人猿若及妓樓圖は、寛文十二年から元祿二年迄の畫を集めたもの、又寛文十二年壬子春菱川師宣圖と明らかに年號落款のある淺草田圃圖(この圖の落款の下の印文に房國といふ文字が見える)が、國民畫鑑に載つて居るが、これは江戸に来て、實際目撃した上で描寫したものであらうと思はれるからである。

歿年に就いては、類考追考及び武江年表に、正徳年中七十餘歳にて終るとあり、又關根只誠翁は同年表に正徳四年八月二日畫家菱川師宣卒七十七歳と書入れして居られるが、飯島虛心氏は一説曰として、關根翁の書入の外、更に本所小梅の常泉寺に葬る(浮世畫人傳には谷中の某寺に埋葬せりとあり)とあるから、其寺を尋ねたが、寺はあれども墓は見出さず、且つ過去帳にも載せてない、殊に遺憾であると書き尙古畫備考に引いてある元祿七年板委繪百人一首の序には「小倉色紙の後をしのびて様々の像贊名筆をふるひ中略風狂したる形をうつし

て彼立圃が休息歌仙のすさみをしのび中略の菱川が古人となりし記念なればとあり、同書跋には、名を廣うし道をたつるは、いづれにかはる所なきにや、爰に菱川氏師宣は、自然と畫圖に奇を顯はして、世に鳴ることを得たるか、此道すける人の爲めに、中略百畫に殘して、續子師房に傳へつ、然るに予多年をちなみ月久して乞求、梓に鏤めて世上の目を悦ばしむるのみ、元祿八曆乙卯四月吉辰大傳馬町三丁目木下甚右衛門板と記してあるから、正徳四年師宣卒といふ追考などの説は誤で、元祿七年歿とするが正しい、又保田村林海山別願院に、師宣が寄進した洪鐘に、元祿七年とあるのも、臨終又は歿後菩提の爲めであるといふ解釋も出來ると論じてある。彼の京傳の「搜奇錄」卷一には、葆真齋維民の答として師宣に關して、年曆は慶安より元祿中迄の人と被存候と記して置きながら、追考には何に據つて正徳年中歿年七十餘と定められたものかと疑はれるが、師宣の歿後、師宣の名をかりて刊行した繪本類が極めて多く、寶永正徳の年號あつて、師宣の名を記したのも往々あるが、正徳四年頃から後には師宣の名ある

ものを見ない、そこで追考や「武江年表」などは、これら刊行の書に據つて、正徳頃まで師宣が生存したものと思ひあやまり、歿年正徳年中七十餘などと記したものであらうが、元祿七年以前の年號ある繪本は、師宣の眞筆で、その後の年號のものは門人と定めてよからう、又肉筆もの、中にも、師宣の落款があつて、實は門人の畫いたものも尠くないとこれも虚心翁の説である。「菱川師宣畫譜」も同説で、從來師宣筆の繪入板本といはれてあるものに付ての眞偽をも考證してある。

畫系に就いては、「類考」には土佐の畫風を好み、浮世又兵衛が筆意に倣つて一家をなしたとあり、虚心翁は又兵衛を慕つては居たやうだが、實際美人畫などを見ると、その骨法及筆意は又兵衛には似ないで、却て懷月堂に似たところがある、と論ぜられ、フエノロサ氏も同説である。が繪本の中には、純狩野派の筆意のものも、純土佐風の繪も見える。又「近世繪畫史」には、人物の願長くて素朴の風あるは、又兵衛に私淑したものだらうが、畫いた人物個々獨立して彫像の

如く、彼是の關係薄く、髮の生際の殊に際立ちて見えるのは、役者の鬘姿から書き出したものかとも思はれるが、主として操人形に縁由したものだらうと書いてある。西澤仙湖氏も人形雑話の中で、師宣が老年に及んで、道樂半分に人形を製作したといふ點より、私は其青年時代に人形を作り、これをモデルにして畫をかけたものではないかと思ふ、實際の人をモデルにするに先つて人形を手本にし、師宣は素人から畫人になつた人であるから、其後も其癖がとれず、其が先入主となつて、實際の人間と遠ざかつたものを畫いたのではないかといふてある。清水晴風氏も、美術の日本中人形と繪といふ題の下にこの事を論じて居る。が、元祿刊行の「色芝居」といふ本の中には、既に師宣は人形を造るにも上手で、役者の姿を手づから刻み、舞臺衣裳そのまゝに彩色した事が載つて居る。「嬉遊笑覽」は反對説)

一體當時の婦女子は紅、白粉の厚化粧で素地を埋めるから、顔などは生氣なく人形的に見える、その上、額づくりというて、黛を以て額をつくるから、輪廓が

はつきり見えるのである、後の繪に髮の生際を精密にかくやうになつたのは、額づくりの風習がすたれたからであると思ふ。又かういふ考も起る。役者が鬘を冠るといふことは、承應以後のこと、貞享三年板、鹿の巻筆の劇場樂屋内の圖參看、それ以前は野郎頭の月代の上に手拭を置いて女の身振を模するばかりであつた。然し師宣は、女歌舞伎、野郎歌舞伎を實地に見物した人であるから、當時の流行である歌舞伎姿が、彼の畫筆を動かさずにはあるまいし、又彼も時俗を寫すに、第一歌舞伎の艶姿をモデルとして、人目を喜ばせようと思はずには居られまい。櫻井丹波掾が金平節を出して、當時關東尙武の氣風に投ずれば、畫工は競て金平本をかき、俳優は金平人形の型を真似て、荒事を初めて人氣を引かうとして居る。彼の坊頭子兵衛の廓通の姿繪は師宣の筆になる、役者繪の始めであるだらう。

かやうの次第で、師宣は土佐、狩野兩派の筆意を學び、天和二年板、屏風掛物繪(鑑參看)又兵衛を慕ひ、得意の色彩を施して、よく濃艶豊麗なる時代の風尚を顯

はし、浮世繪といふ劇然たる一派を形作つたのであると思ふ。又嘉永五年板の「崎人百人一首」の欄外に、或人が師宣に何にか教訓畫をと頼んだところ、直ちに筆とりて拂子を畫き其上に、人よき家に住まんとほつす、甲に似せて穴あることをさとれ。身によき衣を着んことをほつす、寒さを防げば足ることをさとれ。色欲心のまゝならんことをほつす、身の養生をさとれ。この悟りなきものは、人の物を取らんことをほつすの贊をかきて與へたといふことがあるのを見れば、文才あることも窺はれる。次に師宣の畫の變遷を知る便りになるものと思はるゝ畫蹟を記して置かう。

淺草田圃圖

寛文十二、

(國民畫館)

演劇二人猿若及妓樓圖

寛文十二—元祿二、

(浮世繪派畫集)

演劇角田川

延寶七、

(同上)

美人若衆圖

(同上)

半面美人圖

(養川友竹時代筆)

(國華)

以上は師宣の肉筆であるが、版本は萬治元年から元祿七年に至る三十七年間に、百五十種以上あるだらう(浮世繪派畫集)とのことであるが、こは萬治元年板の「鴨長明方丈記抄」を始めとして、元祿七年の遺稿を翌八年に出板したもので、五れいかう「和國百女」などまでをいふたものであるまいか。版本で年號の分つて居るのは次の如きものである。

- 一、 武家百人一首 寛文十二年
- 二、 古今役者物語 延寶六年
- 三、 浮世百人女 天和元年
- 四、 岩木繪畫 同 三年
- 五、 百人一首 同 三年

六、團扇繪様集	同	三年
七、香具大全	同	四年
八、大和侍農繪畫	同	四年
九、千代の友鶴	同	四年
一〇、古今武士道繪畫	貞享二年	
一一、和國諸職繪畫	同	
一二、勇士ちから草	同	
一三、繪本大和墨	同	
一四、名古屋山三郎繪畫	同	
一五、異形仙人繪本	元祿二年	
一六、人倫訓蒙圖彙	同	三年
一七、月次の遊び	同	四年
一八、大和の大寄	同	

師宣の子に師房、師永、師喜などある中に、師房はよく父の筆意を受けて居るが、運筆纖弱の誇りがある。然し構圖彩色の技は優つて、肉筆の遺品は比較的多いのに、繪本の版畫は極めて少いのは、利を得るに敏なる商人等が、師房の畫を父師宣の作として出版したから、師房署名のものは少いのであると、板畫考に見えて居る。それから、師宣畫譜の編者は、師房は始め吉左衛門と稱したが、後ち吉兵衛と收めたから、父師宣の俗稱と同じになつて、菱川吉兵衛とのみ署名したものは、父子混同する基となつたのであらうといひ、又從來師宣筆といはれて居つた次の版本どもの挿畫を師房と斷言して居る。

身延鑑。

福ざつ書。

光廣卿道の記。

浮世繪畫。

繪本大和墨。

姿身百人一首。

津保のいし文。

和國百女。

他の二人の師永、師喜は、世に著はれる程の繪師でなかつたし、子孫には畫工がなかつたから、師宣の畫系は門人古山師重、友房などあつて、漸く續いたやうなものであるが、師重の門人師政となると、當時一新機軸を出して、盛んに世にもてはやされて居た鳥居清信の感化を受けて、菱川派の畫風は全く見る事が出来なくなつてしまつた。

二 英 一 蝶

菱川師宣の歿年を元祿七年とすれば、其頃一蝶は四十一の男盛りであつたのである。一蝶の一生は、随分變化に富んで居るから、生歿年月が一定して居らぬと、種々の事柄を解決するに不都合であるのに、諸書によつて次の二説が

あるから、先づそれから定めて置かう。

(一) 承應元、生。 享保九、正、一三、歿。 年七三。

(二) 承應三、生。 享保九、正、一三、歿。 年七一。

(一)は「近世奇跡考」「雲烟略傳」「浮世繪類考」「無名翁隨筆」「浮世繪師便覽」「名人忌辰錄」「近世繪畫史」「浮世畫人傳」等に見え、(二)は「續近世畸人傳」「武江年表」「古今人物志」等の説である。處が「浮世繪編年史」の編者關場梅屋翁は「英一舟が畫ける一蝶が肖像を見るに、上に英一蝶七十一歳辭世」と前書して、例の「まぎらはす」云々の歌を書し、末に「北窓翁眞筆籠寫嵩谷誌」とあるから、七十三歳説は誤であるというて居られるが、自分はしばらく(一)の生歿説に従つて、次の考どもを定めることとし、(後の流譚考を參看せよ)

一蝶始め、助之進と稱し、父は大阪の人、多賀伯菴というて、勢州龜山石川侯に醫を以て仕へ、劔術なども指南した人である。「古畫備考」寛文六年一蝶十五歳の時、石川侯の命で江戸に下り、「瀧田問答」(一蝶八歳の時狩野安信貫ひ受けて江戸に下

ると古畫備考に見ゆ狩野安信の門に入り、信香と名乗り、又安雄ともいうた。貞享中三十一歳——三四歳剃髮して朝湖と改めた。略傳英一蝶とは何時何故あつて改めたかといふに、英の字は母方の花房を採つたのだともいひ、又近世江都著聞集には英は千人に勝るといふより、自讃してかく改めたと書いてある。雪中吉原圖に英信香と落款したのを見たことがあるから、安信門人時代に既に英字を用ひたことが分る。多賀信香とか、花房信香など、書くよりも、花房に英の字を宛て、英信香と唐様に書く方が當世風であつたのであらうと考へられる。次に一蝶の號は、遠謫せられて後、或朝草花に蝶のとまつたのを見て居たのに、折柄赦免の船が來たから、喜びの餘り斯く號を改めたのであると、墨水銷夏錄にも畫乘要略にも見え、或は奇禍を莊周夢蝶と諦めての號だともいふが、近世逸人畫史の中で喜多村信節は伊勢山田久保一志正治大夫の家に、一蝶配流中寫す所といふ三十六歌仙の像あり、始め十八枚には多賀朝湖の名あり、是は配流中寫して、大神宮に奉納して、歸島の事を祈れり、殘十八枚は赦

に逢ひて後、東都に在て寫す所、英一蝶の款字あり、されば一蝶は歸島後の名なること明かなりと斷言して居る。

又翠翁翠翁朝湖と署名したのもある、牛丸元祿十五年三宅島阿古村で作つた朝清水記の署名にある、舊草堂天和三年三十歳の時の落款にある、舊草堂朝湖とも、狩林齋、狩林散人元祿二年三十六歳の時の落款、一峰、閑人、隣菴、隣濤菴、北窓翁、閑雲、蕉雪、義皇上人、萍雲逸民、虛白山人などの號があるが、朝清水記を見ると、わが住む阿古の浦山三宅島にある村名は、あまざかる鄙の夷中、漁樵交り隣りすれども、貢の鹽の跡にたぐへて、朝な夕なの烟りみぢかく、夜寒の床の明る事なし、とあるから、類考の如く一蝶は八丈島一説三宅島に流されるなど、疑を挾むまでもない。そして隣菴、隣濤菴などいふ號も謫居中に唱へ出したものと思はれる。

一蝶は雲烟略傳に爲人至孝、在島十二年、不堪慕母之情、採島中石及木皮、以設色者、作畫致之於江都朋友、賣以給母氏衣食、其畫以北窓翁爲款、とある如く、遠

島中母を慕ふの情に堪へず、北に窓を開けて、望郷窓というた處から、北窓翁の號が出来たのであるといふ説があるが、山東京山は、一蝶流誦考の中で、一蝶が印に「薛國球印」君受「北窓中隱」薛氏君受等あり、これらの印は一蝶が刻させたる印にあらで、自然唐人の印を購ひ得て、印面の文字に拘はらず、己れが款記に用ひしものなるべし、潤達物に拘はらざる一蝶には、ありがちのやう考へらる、北窓の號も此印を得て名付けしものなるべし、印の筆法刀法共に和習さらになし、唐人の刻なること必せり、といふ考を持つて居るが、雲烟略傳には一蝶の字君受、印譜有薛君受、薛國球印等文、薛國蓋攝國義球其元名といふ見解が見えて居る。

自分は、以上の英一蝶の印や、又兵衛勝以の「碧勝宮」京傳の「巴山人」の印などは、皆豊臣氏以來我邦文雅の徒に賞翫せられた糸印を流用したものではなからうかと思ふ。糸印に就いては横井時冬氏の「芸窓襟載」中にある糸印考などを見ればよく解る。

さて、一蝶が三宅島に流誦された原因に就いては、(一)一蝶が佛師民部、村田半兵衛の二人と共に、百人女臈を出版して、當時の諸侯の奥方の器量の善惡、食物の好不好などまで記し、尙其中に淺妻船圖といふがあるが、これは綱吉將軍がおでんの方を愛して、吹上、泉水に舟を浮べて、遊淫に耽り居ることを諷したものであるとて、近世江都著聞集 (二)將軍綱吉御生母桂昌院の内縁の人(本庄安藝守)を、以上の一蝶外二人で花街に誘ひ出し、大金を費はせ、後ちに安藝守は、吉原の中田甫といふ處で切害せられたからとて、一蝶流誦考、龍溪小説、江戸眞砂六十帖 (三)日蓮宗の支流不受施派は、幕府が世教に害があるとして、禁じた宗旨であるのに、一蝶がこれに歸依したからとて、考証、雜錄 (四)三笠附として俳句の點者となつて、博奕の如きことをしたからとて、遠流に處せられたのであるなど、種々の説がある。以上四説の中、増補類考は(一)説を引用して居るが、近世繪畫史には一蝶は自作朝妻舟を題として、屢朝妻舟の圖を畫く、島より歸りて後にかきしも見ゆれば、これを以て將軍綱吉を諷せりといふ説は誤れり、諷刺によりて罪を得たるもの、何

ぞ更にその罪を重ねて自ら危くせんやと記して(二)説を事實に近いものだらうと論じてある。彼の京傳は既に朝妻舟圖と綱吉將軍放埒事件とは無關係のものとして認めたらしく、近世奇跡考の英一蝶傳中に、かの朝妻舟の繪につきては、あらぬこと々もをいひ傳ふるといへども、もとよりのそら言なり、人の見知りたる船の中に、くゞつ女の烏帽子、水干着たるかたをば、一蝶晩年にかきたり、始めは只小舟の中に烏帽子、鼓などとりちらしたるさまをかきけるとぞ、以上一蝶が流をくむ某の翁、その師某の語りつたへたること々、自ら筆記せる説なり、此説明かにして且つ盡したりといへども云々とかいて居る。「國華」八二號に一蝶自畫贊の朝妻舟圖が載つて居るが、この構圖は一蝶自作の小唄朝妻船によつたものであらうから、遠謫の原因は「百人女」の刊行と(二)説とに歸してよからうと思ふ。

處で、流謫年月や在島年數や、死亡年齢などは、多少本によつて違ふから次に表にして見よう。

流謫年月	同上年齡	在島年數	歸京年月	同上年齡	死亡年月	同上年齡	記載書目
(一)元祿六、十二	四〇	十七	寶永六	五六	享保九	七一	「墨水銷夏錄」
(二)元祿十、十三	四〇	十二	寶永六	五三	享保九	六八	「古畫備考」
(三)元祿十二、十三	四七	十二	寶永六	五八	享保九	七三	「類考」、「便覽」、「繪畫史」、「無名翁隨筆」
(四)元祿十二、十三	四六	十二	寶永六	五七	享保九	七二	「瀨田問答」、「武江年表」

以上の如く、一蝶の流謫されたのは、元祿十一年で、在島年數十二年とするのが普通であるけれども、反古文庫や「江戸眞砂」には、十七八年目に歸參して和應は英一蝶と名を替へて暫く暮しぬとあり特に一蝶の自畫四季繪跋には、謫居にさすらへし事十とせにあまり廿とせに近きをありがたき御惠のめでたき元の都に歸り來る云々とあるのを見れば、(二)説の如く在島年數十七年となるやうであるが、これは元祿の頃御船手逸見八左衛門記録の内書付に

吳服町一丁目新道勘左衛門店

町奉行北條安房守掛り

多賀朝湖

四十二歳

元祿六酉年八月十五日入

是は御詮議之義有之候ニ付安房守宅ヨリ揚屋へ入

右之者元祿十一年寅年十二月二日三宅島へ流罪御船手逸見八左衛門へ渡

ス

とある如く、(二)説は入獄流罪の年數を通算したもので、他の三説は三宅島遠誦の年數だけを擧げたものであらうと思はれる。然しさうすると、一蝶自畫の四季繪跋の「誦居にさすらへし事十とせにあまり甘とせに近きを云々」とある文句が解せられぬこととなるが、しばらくこゝに記して、博雅の教を待つこととした。

要するに一蝶は元祿六年八月十五日入牢(年四二)獄に在ること出入六年、元

祿十一年寅十二月二日流罪(年四七)在島十二年、寶永六年大赦に遇うて歸京(年五八)其後ち十五ヶ年で享保九年正月十三日歿(年七三)といふこととなる。

一蝶は實に多才の男で、書は佐玄龍に、俳諧は芭蕉に學び、俳名を曉雲といひ、其角、嵐雪等と交り深く、金工横谷宗珉、通客紀伊國屋文左衛門等とも親交があつた。又隆達節を好み、自作の小唄朝妻舟、東雲など、松の葉に見え、朝清水の記、四季繪辭などの文章も残つて居る。「龍溪小説」には蝶古後、英一蝶といふ色白く、目大きくすさまじし、物いひ靜なる生付也、繪は名人といふ、生れつき慾深くして、咄ては面白からぬ男也といふてあるが、彼の諸侯と競争して囊中を傾けて、珍奇な一の石燈籠を買ひ求め、毎夜火を點して初茄子を食ひ、天下の一快事だとして人にはこつたといふ話など、江戸兒氣象のおもしろいところが見えると思ふ。又面壁九年の達磨さんより、苦海十年の某妓の話に同情して、女達磨圖の新意匠を創作したなど、豪放洒落の氣分は、到底狩野正風の畫題のみを墨守して、満足しては居られまいから、自畫四季繪跋に、夫大和繪はそのかみ土佐刑部大輔

光信がすさみに……是に始まりて末々に流れ、予が如きの拙きまでは是を元とす……若かりし時……岩佐、菱川が上に立んことを思ひて……とある如く土佐の流も酌み、岩佐、菱川の畫風も真似て見たらうから、狩野家からは破門され、終に一種の輕快洒落な浮世繪を畫き始めるに至つたのであらうが、師宣の濃艶豊麗なる畫風とよい對照である。この一蝶獨得の畫風は、後の俳畫の源流となり、蕙齋一派の略畫の基礎となつたものと思はれるが、惜しいかな、一蝶の多材は一方畫の妙域に到達することが出來ず、即ち狩野を出で、又未だ狩野を出でざるどころ、やがて一蝶が前の探幽後の應舉に伍して、第一流の大家たる能はざる所以にして、又之を賞するものゝ多くは中流に止り、下流の社會にはなほその畫の賞せられざる所以なるべし」と藤岡東圃氏の評せられたのは至極御同感である。

一蝶の子は二人あつたが、あらはれたものがなく、門人にも一蜂、一蟬などがあつたが、一特色あつて、子孫も今日まで傳はつて居るものは、佐脇嵩之である。

東 山 松 竹 畫 卷 一 部



小町 松竹 畫 卷 一 部

光信がすさみに……是に始まりて末々に流れ、子が如きの拙きまで是を元とす、……若かりし時……岩佐、菱川が上に立んことを思ひて……とある如く土佐の流も酌み、岩佐、菱川の畫風も真似て見たらうから、狩野家からは破門され、終に一種の輕快洒落な浮世繪を畫き始めるに至つたのであらうが、師宣の濃艶豊麗なる畫風とよい對照である。この一蝶獨得の畫風は、後の俳畫の源流となり、蕙齋一派の略畫の基礎となつたものと思はれるが、惜しいかな、一蝶の多材は一方畫の妙域に到達することが出來ず、即ち狩野を出で、又未だ狩野を出でざるどころ、やがて一蝶が前の探幽後の應舉に伍して、第一流の大家たる能はざる所以にして、又之を賞するもの、多くは中流に止り、下流の社會にはなほその畫の賞せられざる所以なるべし」と藤岡東圃氏の評せられたのは至極御同感である。

一蝶の子は二人あつたが、あらはれたものがなく、門人にも一蜂、一蟬などがあつたが、一特色あつて、子孫も今日まで傳はつて居るものは、佐脇嵩之である。



小町跡圖 英一蝶筆



嵩之の門から嵩谷が出た。彼の淺草觀音堂の頼政の額は名高いものである。その外は書き立てる程のものがない。

次に信香朝湖一蝶の落款あるもの及び其他の遺品を列記して、一蝶が畫風變化の迹を辿る便としよう。

- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| 一、雨舍圖 | 藤信香書 | 日本帝國美術略史 |
| 二、乗合船圖 | 同 | 同 |
| 三、雪中吉原圖 | 英信香筆 | |
| 四、牟禮高松圖 | 翠菴翁朝湖書 | 眞美大觀 第十三册 |
| 五、美人圖 | 朝湖齋たはふれに圖 | 國 華 七六號 |
| 六、風流女福祿圖 | 舊草堂朝湖圖 | 眞美大觀 第十七册 |
| 七、僧正遍昭圖 | 翠菴翁書 | 國 華 二二九號 |
| 八、兒女娛樂圖 | 朝湖筆 | 同 二二二號 |

第一期

浮世繪の諸派

九、布晒舞圖

藤牛慶書

國華 二〇六號

一〇、日待圖 于時正徳元年冬日北窓翁英一蝶書

國華大觀 第一三〇號

一一、懸瀑飛燕圖 北窓翁(印ノミ)

國華大觀 第一三七號

一二、落雷圖 英一蝶書

眞美大觀 第十七册

一三、琴棋書畫圖屏風 英一蝶書

同 第九册

一四、朝妻舟圖 英一蝶

國華 八二號

一五、山水圖

同 三三號

一六、神樂殿圖

同 五五號

一七、十二月繪卷

同 八五號

一八、端午圖

同 九三號

一九、狂言圖

國華 九九號

二〇、蟬丸圖

眞美大觀 第十五册

以上(二)より(九)までは、一蝶中年頃迄の作品と思はる。風流女福祿壽圖は、座鹿に腰打かけた三平二満女、右手に團扇左手に花枝肩げたところ、前記の女達磨圖と共に、早くから奇趣に富んで居つたことが解る。彼の浮世繪畫家が描く浮世見立圖は一蝶の構圖などが與て大に力あつたものであらうと思ふ。

(十)の日待圖は誦居中の作、罪を赦されて家に歸るを得るの日を待つといふ意を寓したもので、一蝶畫中純浮世繪風の大作である。(十一)は純狩野風の作品、(十二)は老熟輕妙の筆致を味ふべく(十二)の落雷圖の如きは、雷公雲踏みはづして社頭に落ち、鳥居に傳はつて上天するところを、逃げ惑うた神官先生、雨傘の破れから顧みて驚ろくところ、意匠奇警、描筆輕妙、一蝶作品中の逸品であると思ふ。

三 懷月堂

浮世繪史上、懷月堂は、有名な割合に、傳記畫系などの不明なのは、遺憾なことである。「浮世繪派畫集」には、懷月堂は、菱川の後に、出で、特殊の畫風を立て、師宣以外に一派をなさんと欲し、當時狩野より出でたる風俗畫を以て、一世を風靡せし英一蝶の筆致を取りて、之を浮世繪に變化し、配するに壯麗なる服飾文様の設色を以てして、一家の機軸を出したるものには、あらじか、其肥瘦強き用筆は、一蝶より脱化したる迹決して覆ふべからず、落款常に日本戲畫と記したるは、何となく菱川の大和繪師に對抗したるものと見るべきなり、懷月堂を「花街漫錄」には、元和中とあれど、其の時代の遺品存せざれば、或は元和は天和の誤には、あらぬか、然し、古畫備考には、寛文頃の人となし、あるを以て見れば、菱川と同時代の人か、又懷月堂の始祖を異本類考にては、安慶と記し、あれど、安慶の遺品あるを見ず、安度の作は、往々あり、加ふるに慶と度と、印文頗る誤讀し易く、且

の懷月堂末葉と自稱せる度繁度秀等は、安度と共に安度の印を用ひしのみならず、同派作者の名字中慶字ある者を見ざるより考ふれば、安慶は安度の誤にして、懷月堂の祖は安度ならんか云々とあるが、飯島虛心氏は「花街漫錄」に、元和中淺草に住しける人にて、御府内浮世繪師の始めなりとあるのと、懷月堂の畫法、筆意、着色等が、土佐狩野の法に據らで、多く合せ繪具を用ひて、一種壯麗の色を現はし、日本戲畫懷月堂と署して、謙遜の中に自ら日本畫の眞面目を發揮して居るのは、又兵衛師宣の魁をしたものというてよからう、即ち又兵衛よりも少し古く、師宣の如きは、或は懷月堂の門人であらう、又懷月堂の畫法が、美人の立姿を紙中一パイに畫いて、上下を明けず、衣紋の描線極めて太いのは、額面畫の畫法と思はれる、隨て當時販途需用の廣大な繪馬額を業として、世々淺草に住し、觀音堂や駒形堂奉納の繪馬を賣つた人ではあるまいか、府内備考には、古くより淺草に繪馬屋があつて、梶原景時の畫いた割板の繪馬畫を藏せる由記してあるが、懷月堂は、或はその繪馬屋ではあるまいかというて居られる。

一體、繪馬を神社に奉納するといふことは、古く、北山抄卷一に板立御馬、朝野群載卷二に色紙繪馬、今昔物語に繪馬のことが見えるが、板立御馬といふものは、木で造つた馬で、色紙繪馬といふは、畫にかいた馬のことで、神馬を獻ることが出来ぬ場合、かやうな處置に出ることがあつたものと見える、これらが繪馬の始めであらう。降て、宣胤卿記、永正十七年十一月九日、多武峰遷宮の條にも、繪馬二枚進云々と見えて居るが、徳川期に入つては、繪馬問屋といふものが多くあつて、府内ばかりでなく、遠く諸國へも積み出したものであつたさうな。この繪馬額が、後には馬に限らず、禽獸、人物など畫いた額、太平記卷廿九、阿保、秋山河原軍の條參看を奉納するに至つたのである。

要するに、懷月堂の年代に就いては、以上の説の外、浮世繪類考に寶永、正徳頃の人とあり、武江年表、正徳年間記事に懷月堂號安慶稱源七この頃行はるとあり、近代世事談、享和十九年刊行に現在に懷月堂、奥村政信等なりと記し、畫家人名略には元文、寶暦頃まで行はるなど、書いてあるが、遺品も少く、記録も闕け

て居るから、確證を得られぬのは遺憾のことである。寫本、増補浮世繪類考に寶永より享保頃の人、俗稱岡崎源七號安慶、淺草諏訪町に住せり、正徳年間奥女中江島一件にて生島新五郎遠島の時共に伊豆の大島に謫居すと其故を知らずといふ記事がある。この江島事件といふは、正徳年中大奥の老女江島といふものが、山村座の俳優生島新五郎に通じ、事顯はれて罪せられたことであるが、懷月堂との關係に就いては、まだ諸書に見出さない。

案するに、懷月堂が肥瘦強き用筆と、壯麗なる服飾文様の設色を以て、一家の機軸を出したといふことは、浮世繪派畫集の所論に同意するが、時代に就いて又兵衛より少し古く、師宣の如きは懷月堂の門人ならん、そして畫法は美人の立姿を紙中一パイに畫いて上下を明けずといふ飯島虛心氏の説には賛成が出来ぬ。

自分の考では、懷月堂も始祖安度から以下、自ら末葉と名のる人々、及び私淑した人々が、多く一人立美人を畫いたのであるが、始祖安度の筆には、浮世繪派

畫集に載つて居る貴人治髮圖、男女看書圖の如き一人立の美人畫でないものもあつた。頭髪の生際の線描きになつて居る邊から考へても、師宣よりは少し後れ、一蝶とは同時代で鳥居清信、西川祐信等より少し先輩であつたと思ふ。彼の鳥居派一派の畫法は、この懷月堂に負ふところ多く、其他宮川長春、羽川珍重、奥村政信等は皆懷月堂の影響感化を受けたものであらう。

懷月堂一派の人々で懷月堂末葉と落款に記すものは度秀、度繁、度辰、度種及び長陽堂安知である。いづれも傳統は解らないが畫風から推しても、正徳享保頃の人で、多分懷月堂の始祖安度の門人であるだらう。この外懷月堂の流れを汲んだであらうと思はるゝ人は、空明堂信之、東川堂里風、梅祐軒勝信、梅翁軒永春、西川照信、松野親信などである。次にこの人々の遺品を記して置かう。

- 一、貴人治髮圖 懷月堂安度筆
 - 二、男女看書圖 同
- セー、エス、ハツパー氏藏 浮世繪派畫集 第三册
桑原羊次郎氏藏 同

婦女圖

懷月堂度秀筆



浮世繪派畫集所載

畫集に載つて居る貴人治髮圖、男女看書圖の如き一人立の美人畫でないものもあるし、頭髮の生際の線描きになつて居る邊から考へても、師宣よりは少し後れ、一蝶とは同時代で鳥居清信、西川祐信等より少し先輩であつたと思ふ。彼の鳥居派一派の畫法は、この懷月堂に負ふところ多く、其他宮川長春、羽川珍重、奥村政信等は皆懷月堂の影響感化を受けたものであらう。

懷月堂一派の人々で懷月堂末葉と落款に記すものは度秀、度繁、度辰、度種及び長陽堂安知である。いづれも傳統は解らないが畫風から推しても、正徳享保頃の人で、多分懷月堂の始祖安度の門人であるだらう。この外懷月堂の流れを汲んだであらうと思はるゝ人は、空明堂信之、東川堂里風、梅祐軒勝信、梅翁軒永春、西川照信、松野親信などである。次にこの人々の遺品を記して置かう。

- 一、貴人治髮圖 懷月堂安度筆
- 二、男女看書圖 同

- セ、エス、ハツ、パー氏藏 浮世繪派畫集 第三册
- 桑原羊次郎氏藏 同

婦女圖

懷月堂度秀筆



浮世繪派畫集所載

三	丹繪美人圖	同	浮世繪研究會藏	木版浮世繪 大家畫集
四	婦女圖	同	高嶺秀夫氏藏	浮世繪畫集
五	婦女圖	懷月堂末葉度秀筆	同	同
六	婦女圖	同	同	同
七	婦女圖	同	同	同
八	婦女圖	同	村山龍平氏藏	同
九	婦女圖	長陽堂安知筆	高嶺秀夫氏藏	浮世繪畫集
一〇	婦女圖	空明堂信之筆	同	同
一一	婦女圖	東川堂里風筆	同	同
一二	婦女圖	梅祐軒勝信筆	同	同
一三	婦女圖	梅翁軒永春筆	九鬼周造氏藏	同
一四	婦女圖	西川照信筆	太田梅子氏藏	同
一五	婦女圖	松野親信筆	九鬼周造氏藏	同

第一期



四 鳥居清信

菱川師宣や懐月堂に私淑して、鳥居の一派を開いた清信は、始め京師に住し、後ち江戸に移る、と増補類考に見えてあるが、浮世畫人傳には清信の父は、清元（正保二—元祿一五）というて大阪の俳優で、前額を覆ふ紫帽子を工夫したり、又芝居の看板繪などもかいた人であるが、當時文化の中心は江戸に移つた頃であるから、清元は考へる所があつたのであらう、貞享四年四十三歳の春一家江戸に移り、元祿三年始めて市村座の看板を畫いた要補とある。清信は父清元二十歳の時の子で、寛文四年に生れ、享保十四年に六十六歳で死んだ人である。清信の畫系に就いては、寫本増補類考に、最初は菱川風の古代畫の風俗なり

美人少女圖

鳥居清信筆



浮世繪派畫集所載

四 鳥居清信

菱川師宣や懐月堂に私淑して、鳥居の一派を開いた清信は、始め京師に住し、後ち江戸に移る、と増補類考に見えてあるが、浮世畫人傳には清信の父は清元（正保二—元祿一五）というて大阪の俳優で、前額を覆ふ紫帽子を工夫したり、又芝居の看板繪などもかいた人であるが、當時文化の中心は江戸に移つた頃であるから、清元は考へる所があつたのであらう、貞享四年四十三歳の春一家江戸に移り、元祿三年始めて市村座の看板を畫いた要摘とある。清信は父清元二十歳の時の子で、寛文四年に生れ、享保十四年に六十六歳で死んだ人である。清信の畫系に就いては、寫本増補類考に、最初は菱川風の古代畫の風俗なり

美人少女圖

鳥居清信筆



浮世繪派畫集所載

しが、中頃より畫風さまざまに變化したりと見え、此花第十三枝には、元祿初年の畫風は師宣風、同七八年頃から漸次變化して、同十三四年頃に一變した、風俗四方屏風及び娼妓畫幀は此筆意である、後世鳥居風と稱せらるゝ、特異の筆意は正徳後のことである、といつて居る。かの元祿六年五月の開板にかゝる、芝居百人一首を見れば、清信が此頃もなほ師宣風を模して居ることが解る。要するに清信の畫風は以上三期の變遷あるものと思つてよからう。

清信初期の畫風を窺ふに足るものは、金刀比羅宮祭禮圖(眞美大觀第二十冊所載)で肉筆の遺品中最も大作にして、鳥居派の特徴は著しからずと雖も、人物の畫法古雅にして頗る愛すべし、印文清信の外に岩佐を用ひたるは、蓋し又兵衛を慕ふに出でたるならんかと、眞美大觀に評して居る。又浮世繪派畫集には畫風稍西川に似たる所ありとて、漆畫演劇常盤御前圖を載せてあるが、自分の考では第二期は懷月堂模倣時代とでもいひ、第三期は鳥居畫風時代とでもいはうか、前者の好標本は美人少女二人立圖(浮世繪派畫集)後者のは雨中美人

圖(同上畫集所載)などであらう。尙同畫集には、本朝二十四孝の挿畫や漆繪の演劇不破伴左衛門、同奈須與一宗高の小圖が載つて居る。

清信の肉筆は、今傳はるものが誠に少いが、式亭雜記に雜司谷鬼子母神本堂の左の方なる稻荷の社正面より右の方に丹前狂言の額があると記してあるが、今もあるかどうか。版畫では漆畫で、市川海老藏、澤村宗十郎、京下り辰岡久菊、玉澤才次郎、松本七藏、松本幸四郎、瀬川菊次郎、市川宇左衛門などの細繪を高嶺家で見たことがある。版本では、畫本本朝二十四孝一冊、やすなものがあり、一冊、四場居色競(初名芝居百人一首)二冊、風流四方屏風二冊、娼妓畫牒二冊、朝敵橋辨慶一冊、艶詞兩巴卮言一冊、古今名物化物噺二冊などある。彼の清信が芝居看板繪を始め、例の蚯蚓描、瓢箪足の鳥居派獨特の様式を大成したのは、父の感化もあつたらうし、又飯島虛心氏の説の如く、懷月堂の肥瘦甚だしき筆法や、額面畫法に得るところも多かつたらうが、主として金平人形をモデルとしたものではなからうか。鳥居畫系譜稿といふ本には、清信が濃彩の畫法を始め

たのは、切支丹の刑人と共に日本橋に晒された洋畫の聖母圖に得るところがあつたのだと書いてあるさうだ。

さて又こゝに特筆大書して置くべきことは、鳥居清信の落款ある彩色摺のものが、今日存して居るといふことである。このことは、既に萬象亭の「反古籠」に記してあるが、從來色摺版畫の起源を、燕石襟志や嬉遊笑覽では明和二年板木師金六といふものが始めたといひ、蜀山人は「一話一言」で明和二年より二十一年も前の延享元年に芝神明前の江見屋上村吉左衛門が始めて數枚の版を用ひて、見當を合せて彩色を摺ることを工夫したから、今に見當のことを上村といふのであると論じて居るが、清信が始めたとする、遅くも延享元年より又十五年も前(清信は享保十四年死)に、色摺版畫は出來たものとなるのである。然るに近頃、木浮世繪大家畫集は、寛延四年清信歿後二十二年と明記せる鳥居清信筆の紅摺繪花賣若衆圖を載せて、鳥居派に二代清信あることを論じ、随つて紅摺繪は初代清信の創始にあらずと定め、なほ當時清信は盛んに製作し

つゝあれば、清倍の改名にあらざることを明かにして、清信の名を稱したるは、全く別人なりといはざるべからずと説いてある。詳しくは次期の清倍傳で述べることゝしよう。

五 同期浮世繪畫家

この期の代表畫家菱川師宣、英一蝶、懷月堂、鳥居清信及びそれらの子弟門人等に就いては、以上各傳記中で述べ、又系圖上にも記しておいたから、こゝにはその外の畫家を擧げておかう。

小川破笠

名は觀、號は夢中庵、卯觀子などいうた。専門は蒔繪であるけれ

ども、浮世美人圖もかいた。江戸の人で後ち津輕侯に仕へた人である。「名人忌辰錄」には一蝶の門人で一蝶○というたとあるが、「浮世畫人傳」には一蝶、其角、嵐雪などとは親しい友達であるとかいてある。兎に角畫風は一蝶と違ふやうだ。普通傳記書には延享四年六月三日八十七歳で歿したことゝなつて居るが、「浮世繪師略傳」には享年八十四とある。

宮崎友禪

京都の人で、衣服に墨繪や彩色繪をかくが、水に浸して洗うても

落ちぬから、大に世にもてはやされ、後にはこれを染出して、友禪染と名づけたといふことである。「扶桑畫人傳」浮世繪編年史稿録 又友禪は京都某院の僧で、姓氏不明の人

であるが、光琳の畫風を學び、設色に妙を得て一格を出した。彼の友禪染はこの人の工夫したものとか、或は衣服の上繪をかいたとか世にいうて居るけれども、友禪の畫が設色美麗で意匠巧妙であるから、それをまねて衣服の上繪にかき、友禪模様と名付けたのではあるまいか、兎に角一種の畫風を案出して浮

世繪師傳記中一種の花を添へたものである。「浮世畫人傳抄録」又此花第四枝には、友禪ひいながたの卷末に、友畫齋日置清親圖之とある日置清親は宮崎友禪の異名で、都繪馬鑑所載京都祇園社掛額村山座狂言圖に月直氏清親筆とあるも同人であらう。そして友禪は、扇工で染工をも兼ねて居たらしいなど、論じてある。

石川流宣 名は俊之、俗稱伊左衛門、號は流舟、師宣と同時代の人で、盛紫記咄とかいふ落し噺の本は自畫作であるといふことである。その外、大和耕作繪抄「江戸圖鑑綱目」などをかいて居る。

詩繪師源三郎 奈良の人で、元祿三年版の「人倫訓蒙圖彙」をかき、又彼の井原西鶴の浮世草紙の挿繪は署名はしてないが、大概此人の筆であるといふことである。

吉田半兵衛 京師の人、長谷川長春(京師の浮世繪師)と同時の人か。「好色旅日記」に今の長谷川吉田が筆にもなるまい云々とあるのは半兵衛のことで、又元祿五年板「買物調方三合集覽」に四條通御旅所のうしろ當世繪かき半兵衛とあるも此人のことであらう。貞享三年板の「好色訓蒙圖彙」は半兵衛の筆で、其後江戸で再板したのは師宣で三板は祐信である。

月直清親 天和頃の人、祇園社に村山座狂言額あり。

繁尙 延寶頃の人、扁額規範に見ゆ。

山本傳六 元祿頃の人、同上。

居初津奈女 元祿頂の人、女實語教「女童子教」などかく。

當世繪又兵衛 元祿五年、京都細見に見ゆ。

井上勝吉 寶永頃の人、繪本稽古帳「丹前雛形」などかく。

杉村治信 天和頃の人、古今男をかく。

井上勘兵衛 京都祇園社に此人のかきし扁額ありと。

大森善清
東坡軒
杉村正高
探幽齋正信
川島紋清

寶永、正徳頃の人、新薄雪物語「したれ柳」をかく。
元祿十三年板野郎舞姿記評林中に此名見ゆ。
師宣同時の人、俗稱治兵衛、
師宣同時の人、
寶永正徳頃の人、とし草をかく。

六 版畫版本の種類 其二

初期に於ける浮世繪は、色摺の版畫といふものなく、墨摺繪か繪どり本の如き、筆彩を施したもののばかりであることは、既に述べた通りであるが、第一期の畫家も、皆この墨摺繪をかいた。そして墨摺繪の中にも、豎一尺八寸幅九寸五

分位の大判墨摺繪や、豎九寸五分幅一尺八寸程の横繪や、豎一尺幅五寸位の細繪などいふ種類がある。また

丹繪 とて、墨摺版畫の上を丹、綠、青、黄汁などで筆彩したものであるが、中で丹色が最も目立つて見えるからかく名付けたものである。紙の大きさは以上の墨摺繪と同じである。畫家は第一期の人々から第二期の奥村政信、鳥居清倍等までかいた。〔木〕浮世繪大家畫集に、鳥居清信と懐月堂度繁の丹繪の木版畫を載せて居る。享保の始め頃、この丹繪の丹を用ひる代りに、紅で筆彩したものを紅繪、臙脂繪とも書いた、後の紅摺繪と混同してはならぬ」というた。また

漆繪 とて、本來は漆を畫面に塗つたから、この名稱が起つたのであるけれども、後には手数を減じ費用を省くために、墨摺版畫の上を紅、黄、墨などに膠を混じたもので筆彩を施すに至つたのである。が中で墨が特に漆の如く光つて目につくからその頃の前句付にも、「ひかりかややく」、浮世繪にこの

頃着せた黒小袖といふのがあつたが、漆繪をよんだものである。紙の大きさには色々ある。竪二尺三寸横七八寸位のもの、竪一尺四五寸横二尺二三寸のもの、竪九寸五分乃至一尺一寸幅六七寸のものなどある。畫工は第一期、第二期の畫家の外、第三期の石川豊信、田村吉信、同貞信等である。「木版浮世繪大家畫集」に鳥居清倍と西村重長の漆繪の木版畫が載つて居る。版本では

赤小本 として一般民衆の玩物で、縦四寸横三寸位の、表紙は丹色で、上に外題紙を貼付け、たゞとる山のはとゞぎすとか、兎の手柄とか書き付け、紙數五枚位で、畫は菱川風、上に單純な御伽噺を假名で書いたもので、繪が主で文は従である。延寶頃から寶永頃まで行はれて居つたさうだ。「日本小説年表」に見えて居る赤小本の書目は次の如きものである。

たゞとる山のはとゞぎす。 大福長者富貴物語。
本手むぢなの敵討。 京がばけぎつね。
四切手むぢなの敵討。 山 鬼あそび。
古今名物寶づくし。 四由來 鬼あそび。

日本名人そろへ。

枯木にめいよの翁。

神大ふるまい。

初春のいわひ。

新龜萬歳。

三寶船始。

唐人のみかり。

日本馬ぞろへ。

仙人づくし。

兎の手柄。

赤本、黒本 として赤小本の發達したものである。この二書の内容も體裁も大體赤小本と同じであるが、縦六寸横四寸五分位の大きさで、赤本は丹表紙を用ひ、黒本は黒表紙である。畫工は第一期から第二期にかけてかいて居る。たとへば赤本には藤田秀素の「桃太郎」、西村重長の「猿蟹合戦」、同重信の「鼠のゑんぐみ」、奥村政信の「花さき爺おいれの榮華」、豆まき男、近藤清春の「聖徳太子」、羽川珍重の「化物合戦」、其他畫家の署名しない「金平武者修行」「舌切雀」「猿樂合戦」「花見鼠」「鼠嫁入」「夕霧阿波鳴門」「鹽賣文太物語」「花さかせ爺」などがあり、黒本には八十部の中、富川房信が二十四部、鳥居清信が一部、同清倍が四部、同清經が七部、同清滿

が一部書いて居るが、其の他は署名がない。以上書目は「日本小説年表」に據る

浮世草子 　これは井原西鶴一派の作が多く、挿畫は菱川師宣、古山師重、蒔繪師源三郎、吉田半兵衛、鳥居清信、奥村政信等の筆である。徳川時代の小説と名の付くものは、此頃からであるというてよからう。本の大きさは、多くは美濃判であるが、中には半紙形のものもある。表紙は紺表紙、茶表紙、又は白茶地に藍で繪子形に丸龍などを描いて居る。浮世草子の書目は、「日本小説年表」に載つて居るだけでも、約五百五十部あるが、畫家の名が見えて居るのは、以上に列記した位のもので、其他は畫家の署名がない。

八文字屋本 　八文字屋といふのは、京都の書肆の名で、主としてそこから發行する本であるから、この名があるのである。挿畫は西川祐信一派の筆である。これに枕本と大本との二種あつて、前者は大半紙半切を横に綴じた横本で、表紙は深緑色の無地をかけたものが多い。後者は前者の體裁を大形にしたものである。

第二二期

(享保元——寛延三)
西曆一七一六——一七五〇

——西川派、宮川派、西村派、奥村派、鳥居派——

概説

この期は、享保元年から寛延三年まで三十五年間であるが、代表畫家としては、西川祐信、宮川長春、奥村政信を主として、これに羽川珍重、西村重長、鳥居清倍を加へたのである。祐信は長壽の人で前期から本期の終まで居つた人であるが、便宜のためこの期に入れたのである。其他の畫家も皆第一期末の寶永正徳頃には畫筆を執つて居つた。

祐信は京都の人で、狩野永納と土佐光祐に就いて學び、後ち一家をなして西川流と稱せられ、優雅艶麗な京都的美人を描いた。當時京都の祐信に對して江戸には鳥居清信父子、宮川長春、奥村政信などが居つた。長春は菱川、懷月堂

の畫風を渾融し、狩野風も加味して浮世繪中第一に氣品の高い人物をかいた。この長春から宮川派は起つたのである。政信は、元來本屋であるから、各種の繪本に接することの便宜があつたからでもあらうが、師と定つた人もなく、自ら各派を參酌して一家を立てたやうである。随つて、政信の遺品には、各種の畫風の見ゆるものがあり、また浮繪、紅摺繪などの創意にも商賣柄便利があつたのであらう。

重長は、傳記もあまり詳しく解らず、遺品も多い方でないが、門人から鈴木春信、磯田湖龍齋、石川豊信などを出して居るから、西村派の始祖と見做さるゝのである。清倍は清信の子で鳥居家の二代であるし、畫も父より上手で芝居看板番附、黒本、漆繪、丹繪などをかいて居る。清信の門人羽川珍重は、餘り知られない繪師であるけれども、浮世繪師としては珍しい程高潔な人物で、技倆の優れて居ることも遺品によつて十分認めることが出来るから次に擧げて置くことゝした。

此期に入つて特に注意すべきことは、色摺の發明があつたことである。前期に於ては、漆繪、丹繪の如く筆彩したものばかりであつたのが、享保頃紅、藍、黄の三色摺（紅摺繪）或は紅、草の二色摺（草繪）などが創められたのである。

一 西川祐信

浮世繪が江戸に於て師宣によつて始められたことは既に述べた如くであるが、その師宣前後の又兵衛といひ、一蝶といひ、鳥居派の先祖清信といひ、皆生國は京攝地方で、後ち江戸に移つた人々である。然るに京攝方面にばかり居つて、浮世繪を畫いたものは、野々口立圃、宮崎友禪、大森善清、吉田半兵衛、川枝豊信、川島重信等であるが、最も名聲を博した浮世繪師で、而かも純京師人は、西川

祐信である。祐信の歿年に付ては、(一)花洛古墳に寶曆元年歿行年七十四、三條大宮妙泉寺に葬るとあるが、(二)都繪馬鑑所載の祇園社釣狐の額に、延享元甲子歲五月西川右京祐信行年七十四歲筆と記し、又繪本忍草の自序に寛延己巳の春自得叟七十九歲とあるから、寶曆元年八十一歳で歿したことゝなる。(三)忌辰録には、狩野永納門人後ち土佐光祐に學ぶ、寶曆四卯年九月十一日歿歳八十一とある。

今(二)説に據れば、祐信は浮世繪師中北齋を除いての長壽者で、鳥居清信より七年後れて生れ、二十一年後れて歿した人である。

寫本増補類考に、姓藤原、俗稱右京、初名祐助、號自得齋、一號文華堂、京師に住す、始め狩野永納の門に入りて畫を學び、後ち一家をなして大和繪師と號す、……近代江都著聞集に、この西川も一蝶が跡を學んで、如此なるよし云傳へけるとぞ、八文字屋本に祐信が初心の頃畫きしと見ゆるもの多し、筆意骨法狩野土佐の二流をはなれず、悉く畫法にかなひ、寶曆、明和、安永の頃まで大に世に行はる

婦 女 圖 西川祐信筆



祐信である。祐信の歿年に付ては、(一)花洛古墳に寶曆元年歿行年七十四、三條大宮妙泉寺に葬るとあるが、(二)都繪馬鑑所載の祇園社釣狐の額に、延享元甲子歲五月西川右京祐信行年七十四歳筆と記し、又繪本忍草の自序に寛延己巳の春自得叟七十九歳とあるから、寶曆元年八十一歳で歿したことゝなる。(三)忌辰録には、狩野永納門人後ち土佐光祐に學ぶ、寶曆四卯年九月十一日歿歳八十とある。

今(二)説に據れば、祐信は浮世繪師中北齋を除いての長壽者で、鳥居清信より七年後れて生れ、二十一年後れて歿した人である。

寫本増補類考に、姓藤原、俗稱右京、初名祐助、號自得齋、一號文華堂、京師に住す、始め狩野永納の門に入りて畫を學び、後ち一家をなして大和繪師と號す、…近代江都著聞集に、この西川も一蝶が跡を學んで、如此なるよし云傳へけるとぞ、八文字屋本に祐信が初心の頃畫きしと見ゆるもの多し、筆意骨法狩野土佐の二流をはなれず、悉く畫法にかなひ、寶曆、明和、安永の頃まで大に世に行はる

婦女圖 四川祐信筆



著者藏

中興の刻本大和繪の祖といふべし、獨寐に曰く浮世繪にて英一蝶などよし、奥村政信、鳥居清信、羽川珍重、懷月などあれども、繪の名人といふは、西川祐信より外なし、西川祐信は浮世繪の聖手なり云々、肉筆の繪卷等世人専ら珍重し、東都にて師宣よりも祐信の畫は價貴き事ありしとある外、傳統畫系を詳に記したものを見ないが、當時の浮世繪界に於ける祐信の評判は、この記事でも推測するに十分であらう。

祐信の師といはるゝ狩野永納は、本朝畫史の著者として有名な人で、元祿十三年六十七歳で歿したが、掛物畫工傳記といふ珍書中にある畫であるとして當盛風の少女姿繪を、此花第十七枝に轉載して、これにも狩野云々の解説がなかつたならば、菱川派の畫と見るであらう、永納も亦浮世繪師の一人といつてよいといふて居るが、實にその通りで、元祿頃は土佐も狩野も浮世繪に筆を染めたのである。後ち祐信は、一家をなして西川流と稱せられ、英一蝶の百人女臍の繪にまねて、百人女郎品定として上下貴賤の風俗を寫し、又婉麗なる婦女の姿態

を畫いた繪本淺香山を始め繪本數百部も上梓し彼の八文字屋本のいかゞはしき物の挿畫も描いたが又一面には教訓的の本にも多く筆を執つたから後世まで兒童用家庭用の繪本として珍重せられて居つたことが文政十一年版「眼前教近道」中繪本の次第の條に「およそ庄屋の家にては男子五歳より繪本を見せ七歳より手習子屋へやるべしさてその繪本は西川氏の描し物なかゞよろし云々」とあるのでよく解る。

又祐信の版本中有名な繪本倭比事寛保二の第十卷に上古の繪多く唐畫を師とし學びぬれば唐流に著して其圖する所皆聖賢又は詩人仙客の類のみにして本朝の人物は稀なり偶神像などを畫くと雖皆唐流を用ひ宛然唐土天竺の人倫の如し筆法又唐に著して和人に應ぜず故にたまゞ和人形を畫けるも唐めきて精神こもらず是偏なるにあらざるや此故に其得たる所に本付て和流を卑しめ圖形をなすにも唐山水唐耕作唐兒遊びなど皆唐に歸して本朝を捨つ是遠く他の國を信じて近き我國を卑しむるの心ならずや此國にして此

國の風俗を見識せば豈樂しからざらんや嘆息せずんばあるべからず予専ら和畫に心を入れて畫くも此意にして強て偏るにはあらずと記してあるが狩野、土佐の門から出で浮世繪の西川流をかくに至つた彼の抱負を知ることが出来るであらう。

祐信の美人には著しい變化は認められない多少肥厚な體格ではあるが優雅艶麗な容姿は京都婦人をモデルとしたものであらう一目すれば忘れることの出来ない特殊の筆致がある。繪本類は百數十種三百冊以上もあるといふことで大阪雅俗文庫發行の「西川祐信畫譜」はその繪本中優秀なもの五十面を選定したもので傳記、畫評及繪本目録は三年來注意して調べた所のものを網羅したのである相な祐信研究には至極便利のものである。同畫譜の祐信挿畫版本の部には寶永五年版の「新堪忍記」を第一に記し之は未見の本だから眞偽を保證せぬと斷つて次に享保三年版の「西川ひな形」を署名の始めとし寛延三年版の「繪本忍婦草」を最後のものとして寛延四年(即ち寶曆元祐信歿年後

は祐信の遺稿を出版したものだらうというてあるが、寶永五年は祐信三十五歳、享保三年は四十五歳の時であるから、これより前に祐信挿畫の板本はあるだらう。寫本、増補類考に八文字屋本に祐信が初心の頃畫きしと見ゆるもの多しとある如く彼の八文字屋自笑が元祿十二年に「口三味線」を板行した頃から、若手の作家其蹟、新進の畫家祐信(二十六歳)を備入れたのであるから、この後の八文字屋の出版物には、祐信の挿畫がある筈である。肉筆ものでは、浮世繪派畫集第五冊に美人觀花圖、水邊美人圖、男女歡樂圖、及び七十餘部の繪本の書名を擧げてあるし、浮世繪畫集第三輯には石山寺圖、同第二輯には娼婦圖、同第一輯には婦女圖、柳下美人納涼圖が載つて居る。

祐信の門人十數名(系圖參看)ある中で、男祐尹を始めとして、下河邊拾水、川技豊信、長谷川光信(祐信畫譜に據る)などの外は、あまり知られて居るものはない。それらの略傳筆蹟は、祐信畫譜にあるからこゝには省くことゝした。



は祐信の遺稿を出版したものだらうというてあるが、寶永五年は祐信三十五歳、享保三年は四十五歳の時であるから、これより前に祐信挿畫の板本はあるだらう。寫本、増補類考に八文字屋本に祐信が初心の頃畫きしと見ゆるもの多しとある如く彼の八文字屋自笑が元祿十二年に、口三味線を板行した頃から、若手の作家其碩、新進の畫家祐信(二十六歳)を備入れたのであるから、この後の八文字屋の出版物には、祐信の挿畫がある筈である。肉筆ものでは、浮世繪派畫集第五冊に美人觀花圖、水邊美人圖、男女歡樂圖、及び七十餘部の繪本の書名を擧げてあるし、浮世繪畫集第三輯には石山寺圖、同第二輯には娼婦圖、同第一輯には婦女圖、柳下美人納涼圖が載つて居る。

祐信の門人十數名(系圖參看)ある中で、男祐尹を始めとして、下河邊拾水、川枝豊信、長谷川光信(祐信畫譜に據る)などの外は、あまり知られて居るものはない。それらの略傳筆蹟は、祐信畫譜にあるからこゝには省くことゝした。



二 宮川長春

以上挙げ來つた菱川英、懷月堂などの諸派は、其末流甚だ振はなかつたが、當時京師の西川祐信に對して、江戸には鳥居清信、清倍父子、宮川長春、奥村政信などが居つた。元來、宮川長春の家は、代々尾張國海西郡宮川村にあつたのだが、長春の時に、江戸に移住して土佐家の門人となり、正徳頃は兩國廣小路に住み、後ち芝新堀町に移つた。類考に宮川の末雪溪の話として、寶曆、明和の頃日光御修復の折、長春が一子某は、晝の御用を勤めた狩野家の下請をなし、賃銀は約束通り日光表で請取らうとしたが、渡さなかつたから爭論となり、長春の一子は短慮にも狩野家のもの四人までも殺害したので、自分は死罪、父は流罪、狩野

家は斷絶となつたと書いてあるが、寫本増補類考には日光御修復を咸年とし、下請をしたものを長春とし、單に狩野家とあるを狩野春賀と書し、寛延三年十二月二十九日、賃銀を催促に長春自ら狩野春賀の屋敷に出掛け、口論の末打擲に逢ひ、其上荒縄でくゞられ、裏の芥溜に捨てられたのを、長春の伴父の歸宅の遲きを案じて狩野家に行き、此體を見て大に怒り、遂に刃傷に及んだと記し一説には此時長春の一子は自殺したとあると詳敘して同じく雪溪の話としてある。「名人忌辰錄」の記事もこれと同じで且つ他書に見えない長春の歿年を寶曆二申年十一月十三日享年七十一と明記して居る。

太田南畝の「一話一言」卷三十四雲茶會初集書畫器物名目の中に、寛保二正月元日宮川長春六十一歳自像自畫一幅老樗菴藏とあるから、天和二年生れで、寶曆二年七十一歳となる。

右の次第で、宮川家は斷絶したが、門人に春水といふがあつて、世を憚つて勝宮川と稱し、後ち更に勝川と改めたので、長春は又勝川派の先祖ともなる譯で

ある。

寫本増補類考に長春は土佐家の門人で、菱川氏の畫風を慕ひ、婦女の圖を善くして、當時大に行はれ、請ひ求むる者門に絶えなかつたと記しながら、尙師宣の門人といふ考もあつたと見えて、細註に疑を書き添へてあるが、師宣の歿年を元祿七年とすれば、その時長春は十三歳であるから直接門人となつたものではなからう。又長春の遺品を觀れば、衣褶の描法や、配景の山水樹石等が、狩野風で人物卑しからず、氣品の高いのは、浮世繪中第一流であると思ふ。近世繪畫史には殊に傳彩に長じ、濃艶にして精緻、配合の妙をつくせること古今その比稀なりとて四季の遊の繪卷一部を掲載して居る。蜀山人の調布日記に、相州市場觀音に婦人の遊戯する額があつて、長春の筆で寶永三年四月日とあるとのことであるが、現存してあるかどうか、寶永三年は長春二十五歳の時に當るから、長春の初期の畫風を見るによい標本であると思ふ。

宮川長春の遺品は、國華や浮世繪畫集にも少し載つてあるが、浮世繪派畫集

は長春の畫風の變化を(一)初め師宣を慕ひ(二)中頃懷月堂に倣ひ(三)後ち兩者を
渾融し懷月堂の粗獷を去りて輕巧の新意を加へ以て自家の風格を大成せる
ものゝ如しと論じて多くの遺品を載せて居るから次にその目録を列記して
おくが長春研究には實際浮世繪派畫集第二冊を熟覽せられることをお勧め
する。

四季行樂圖卷

(浮世繪派畫集)第二冊

柳下の憩

浮世繪畫集第二輯

楓園美人圖

同

石山寺

同

美人駒牽圖

同

美人圖

同

今様東下圖

同

驛路美人圖

同

觀梅及觀舞圖卷

同

男女遊樂圖卷

同

既に前期に述べて置いたやうに、一蝶の奇才は、女達磨の新構圖を案出した
といふ傳へもあるが、この期の宮川長春は、美人駒牽圖、今様東下圖の如き美人
と獸類とを配合した上に、一種のもぢりを含めた圖を畫き初めた。また西村
重長の布袋美人を負うて川を渡る圖とか、鳥居清胤の鐘馗美人相合傘圖とか、
勝川春好の美人と達磨圖とか其の外福祿壽の頭に梯子をかけて美人の月代
剃る圖とかいふやうな美人の配合に勇猛なものやおもしろをかしきものを
畫いたものもある。かくて奥村政信の琴高仙女圖、女酒呑童子圖を始め、勝川
春章の竹林七妍圖の如き、或は次々の畫家が當世美人捲簾圖を畫きて香爐峰
を偲ばせ、或は石山寺の紫式部、仲國小督を訪ふ圖に擬し、又は樹下三美人酒宴
圖を畫きて例の三傑を思はせるなど、浮世見立といふ一種の浮世繪師慣用の
畫題があらはるゝに至つたのである。

宮川長春の門人は、前に挙げた春水、長龜の外、一笑、正幸なども同門であらう。それらの遺品は、『浮世繪派畫集』、『浮世繪畫集』などに載つて居るが、高嶺家藏の美人琴彈圖には、勝宮川春水筆と落款があつて、美人の首筋の細き手の細小流麗な描法は、後ちの鈴木春信に感化を及ぼしたのではあるまいか。春章はこの春水の門人で、勝川を名乗り、春章門から春朗が出て、後ち北齋と改め、葛飾派を開いたのである。

三 西村重長と羽川珍重

『古畫備考』に重長は鳥居清信門人、通鹽町地主、後ち神田へ移り本屋になる。浮世繪、役者繪、號仙花堂、享保中とあるけれども、三馬の『類考』書入に西村重長、奥村

戀の重荷

西村重長筆



河合與永氏藏

宮川長春の門人は、前に挙げた春水、長龜の外、一笑、正幸なども同門であらう。それらの遺品は「浮世繪派畫集」「浮世繪畫集」などに載つて居るが、高嶺家藏の美人琴彈圖には、勝宮川春水筆と落款があつて、美人の首筋の細き手の細小流麗な描法は、後ちの鈴木春信に感化を及ぼしたのではあるまいか。春章はこの春水の門人で、勝川を名乗り、春章門から春朗が出て、後ち北齋と改め、葛飾派を開いたのである。

三 西村重長と羽川珍重

「古畫備考」に重長は鳥居清信門人。通鹽町地主、後ち神田へ移り本屋になる。浮世繪、役者繪、號仙花堂、享保中とあるけれども、三馬の類考書入に西村重長、奥村

戀の重荷 西村重長筆



河合燦永氏藏

政信、近藤清春の三人は門人にあらず、各獨立なり。此時代の浮世繪は、すべて鳥居家の畫風を慕ひしものなり、というて居る如く、門人ではないとしても鳥居風である。又寫本、増補類考に一枚繪、繪本多く畫けり、此頃の一枚繪に西村孫三郎と書きたるあり、重長の俗稱か、と書いてあるが、此花第十四枝に孫三郎といふのは重長とは別人で石川豊信のことであるといふことを論じて居るから、委しくは次期の石川豊信の傳で説明しよう。

歿年は、寶曆六年六月二十七日で年六十餘と、名人忌辰錄に見えるばかりである。

重長の傳記は、以上の外詳しく記したものを見ないし、又一枚繪や繪本を多く畫いたといふことであるが、自分の見たものは、浮世繪派畫集第三冊所載の江戸土産挿畫の小圖と高嶺家藏の細繪の漆繪、勢田夕照、比良暮雪二枚、源氏五十四帖の内朝貌、常夏二枚、月見布袋一枚、これらは紅、黃、綠、金粉などを用ひて居る、又唐渡天神(線太し)、雨中鐘鳩、惠比壽大黒圖なども同家藏品中にあつた。木

版浮世繪大家畫集にも漆繪の美人圖が載つて居る、又重長の作品には木版で模擬した石摺畫や、支那版畫に倣つて黒線を用ひずに藍線となし、これに色版を以て淡彩を施した水繪と稱するものを描いたことを記して居る。此花誌上には洋人美人道中の圖と寛延四年辛未歳大小とが載つて居る。この外布袋美人を負うて川を渡る圖と赤本猿蟹合戦及び今様職人畫百人一首、繪本江戸土産、吉原細見通家美を知つて居るばかりであるから、兎角の批評も出來ないが、門人に鈴木春信、磯田湖龍齋、石川豊信などが居つて、感化影響を浮世繪各派の後進に及ぼしたことが多大であるから、以上の畫家を一括して西村派と名付け、委しいことは各人の傳記中で述べることにしよう。

羽川珍重

珍重は武藏國埼玉郡川口村の人で、本姓は眞中氏、名は沖信、俗稱を大田辨五

郎といつた。父は直知というて、馬琴の祖父の叔父である。若い時から江戸に出て、鳥居清信に就いて畫を學び、繪情齋と號し、羽川珍重と名乗つた。生涯妻帯せず、優遊自適心の趣くに任せて繪をかき、日常言行を慎み、遊山の折でも肩衣を脱ぐことがない程の人物で、或時書肆某が珍重に向つて、今後衣食住を私にまかせて、藏板の繪本を畫いては下さるまいかと懇に願つたけれども、貧は士の常人に恵を受ければ人を恐る、われは五斗米のために腰は折らない、況して糊口のために筆を售ることはせん、と答へたといふことであるが、浮世繪師には稀に見るところの人であつた。寶曆四年七月二十二日、たましひのちり際も今一葉かなといふ辭世を残して七十六歳で歿した。

以上の傳記は、燕石襟志を主として、浮世繪類考、浮世繪師便覽、名人忌辰録などを参照したにとゞまるが、この外珍重に就いての新しい記録を發見しないのは遺憾である。

珍重は前述の如き人物であるから、氣の向いた時は、幟でも芝居看板でも繪

本でもかいたが、その外は富者貴人の需にも應じないといふ流儀であるから筆蹟も残らないのであらう。「吉原丸鑑」享保五年板五古淨瑠璃本、八百屋お七「江戸紫」享保五年板上「富士權現筑波の由來」享保二年板二「化物合戦」享保六年板上「三國志」享保六年板「萬海節用集」などいふ版本の挿畫は珍重筆であるとのことであるが、丸鑑中の挿畫が「燕石襟志」に轉載してあるのを見たばかりでその他のものはまだ見ない。「此花所載の美人一人立圖は線は少し細いが、懐月堂の趣があつて、氣品の高い珍重遺品中の傑作であらう、この繪だけを見ても珍重の技量は十分知ることが出来る。」

門人には羽川藤水、羽川元信、羽川和元などがある。

四 奥村政信

俗稱本屋源六(或は源八)といはれた通鹽町の書肆であるが、「古畫備考」扶桑畫人傳「扶桑名畫傳」などでは、烏居清信の門人とし、式亭三馬は獨立畫家と見做して居る。又政信は懐月堂の門人であるから、芳月堂といふたのであらうといふ一説を、此花誌上では、政信は俳家立羽不角の門に入つて、俳諧もやつた人で、芳月堂文角梅翁と號したのも、松月堂法眼不角千翁に擬したものであらうと論じて居る。以上の外親妙、丹鳥齋などいふ號もある、肩書には師宣祐信などに倣つたものか、日本繪師風流大和繪師など記し、また東武大和畫工、おやまゑ畫工、浮世繪流根元などともかいて居る。

又「浮世繪派畫集」には、肉筆の大奥骨牌遊圖、美人戲猫圖、小倉山圖を載せてある。そして政信の畫風に就いては、懐月堂の影響はないが、浮世草子、しらみ本、黒本の挿畫は烏居風を帯び、繪本類となると、畫風も變化して、菱川、西川の妙を奪ふに至つたといふことがかいてあつたが、自分の見た政信の遺品中には、線の太い懐月堂に似たものもあり、繪本や漆繪などには、描線の雄健なこと、金平

本を見るやうなもの、狩野派と思はるゝやうなものなどもあつた。漆繪、浮繪、紅繪のことに就いては、他の處で述べてあるが、いづれも政信の創意であらう。繪本江戸繪簾屏風は聖賢、神仙、武者、婦女、風景などをかいたもので、狩野、土佐の筆意も見え、且つ費長房仙女、琴高仙女、江口普賢、兒文珠などは今様風俗にかきなしたものの即ち、浮世見立である。又近江八景圖の「浮畫風のものもあつた。繪本小倉錦」は百人一首の歌意を今様女風俗にかきなしたもので、構圖の巧妙を極めて居る。「木版浮世繪大家畫集」には兩國橋夕涼見、大浮繪圖、紅摺繪お七、吉三圖も載つて居る。

政信の挿畫にかゝる版本は、奥村政信畫譜に載つて居るのだけでも、五十四部百五十冊ほどあるやうだが、小説年表には寶永四年に浮世草子和漢、善漢男色比翼鳥六冊、紅白源氏物語六冊が見えて居るばかりであるのに、好古類纂には政信筆の元祿十七年刊「養老瀧」といふものがあるとかいてある。今政信の歿年を明和五年、七十九歳とする「名人忌辰録」の説に従へば、元祿十七年(即ち寶永元年)

お七、吉三

奥村政信筆



木版浮世繪大家畫集所藏

本を見るやうなもの、狩野派と思はるゝやうなものなどもあつた。漆繪、浮繪、紅繪のことに就いては、他の處で述べてあるが、いづれも政信の創意であらう。「繪本江戸繪簾屏風」は聖賢、神仙、武者、婦女、風景などをかいたもので、狩野、土佐の筆意も見え、且つ費長房仙女、琴高仙女、江口普賢、兒文珠などは今様風俗にかきなしたもので、即ち「浮世見立」である。又近江八景圖の「浮畫風」のものもあつた。繪本小倉錦は百人一首の歌意を今様女風俗にかきなしたもので、構圖の巧妙を極めて居る。「木版浮世繪大家畫集」には兩國橋夕涼見大浮繪圖、紅摺繪お七吉三圖も載つて居る。

政信の挿畫にかゝる版本は、奥村政信畫譜に載つて居るのだけでも、五十四部百五十冊ほどあるやうだが、小説年表には寶永四年に浮世草子和漢善惡男色比翼鳥六冊、紅白源氏物語六冊が見えて居るばかりであるのに、好古類纂には政信筆の元祿十七年刊「養老瀧」といふものがあるとかいてある。今政信の歿年を明和五年、七十九歳とする、名人忌辰録の説に従へば、元祿十七年(即ち寶永元年)

お七、吉三

奥村政信筆



木版浮世繪大家畫集所藏

は十五歳の時となるし、寶永六年版獨遊軒好文著、風流鏡が池の中で、今の奥村が畫きし官女、ひすめ、嫁、遊女その風俗をうつし、繪は、ざりとは繪とも思はれず生きたる人の如くなり」と賞讃して居るのは、二十歳の畫家、政信、寶永六年は二十歳のこと、は思はれない。これらの點から考いて見れば、山崎美成の「名譽往來」や「浮世畫人傳」の説の如く政信の歿年を明和元年七十九歳とする方がよいと思はれる。

さて、終りに一言を附け加へて、江湖の教を仰ぎ後考をも俟つこと、したのは、浮世繪展覽會目録に記載せるフェノロサ氏の説には、浮世繪師便覽等に西村重長の男かと記せる西村重信を重長の父として奥村派の一人とせり、西村重信は奥村派の一支流をなし、其子重長も亦父の如き奇人にして、鈴木春信、北尾重政の師なれば、眞の主權者といふべし、重信の作は甚だ稀なり、次に西村重長筆の秀郷龍宮に入る圖の畫評中に、重長の大判板物にて、政信の影響を被りたること著しく、中央に立てる美人は恰も政信の筆に成れるが如し、重長及び

石川豊信は、利信の死去或は廢業後、政信の勢力を持続せる二大家なりとあり、その直接の門人にあらずとするも、流派を汲める者たることは明かなり、殊に石川豊信に至りては最も奥村派に浸染せるものならん「奥村政信畫譜」とある記事であるが、以上の西村重信を重長の父とすることは、兎に角、石川豊信傳參照、奥村派の一人とする説は、浮世畫人傳に清春、重信村西、政信村奥はおのゝ獨立せしものなりとある外、まだ諸書に見受けない、且つ重長及び石川豊信を、利信普通、政信の子又は門人としてあるの死去或は廢業後、政信の勢力を持続した二大家として居るが、奥村政信は西村重長の歿年寶曆六年より八年後の明和元年に歿した人であるから、重信重長の父としてを奥村派の一人と見做したり、利信の死後、政信の勢力を持続した大家と定めることはどうかと思ふのである。

奥村政信の後には利信、政房の二人ある位であつた。光月堂、萬月堂などといふ畫家もあるが、奥村の流を汲んだ人々であらう。

役者

鳥居清信筆



木版浮世畫大家畫集所載

石川豊信は、利信の死去或は廢業後、政信の勢力を持続せる二大家なりとあり、その直接の門人にあらずとするも、流派を汲める者たることは明かなり、殊に石川豊信に至りては最も奥村派に浸染せるものならん「奥村政信畫譜」とある記事であるが、以上の西村重信を重長の父とすることは、兎に角、石川豊信傳參照、奥村派の一人とする説は、浮世畫人傳に、清春、重信西村政信、奥村はおのゝ獨立せしものなりとある外、まだ諸書に見受けない、且つ重長及び石川豊信を、利信普通、政信の子又は門人としてあるの死去或は廢業後、政信の勢力を持続した二大家として居るが、奥村政信は西村重長の歿年寶曆六年より八年後の明和元年に歿した人であるから、重信重長の父としてを奥村派の一人と見做したり、利信の死後、政信の勢力を持続した大家と定めることはどうかと思ふのである。

奥村政信の後には利信、政房の二人ある位であつた。光月堂、萬月堂などといふ畫家もあるが、奥村の流を汲んだ人々であらう。

役者

鳥居清信筆



木版浮世畫大家畫集所載



五 鳥居清倍

清倍は始祖清信の男で、鳥居家の二代である。父清信は享保十四年に六十六歳で歿し、母は正徳六年に四十二歳で死んだのであるが、一女三男あつて清倍は長男であると『浮世繪派畫集』に記して居る。然るに『名人忌辰録』に清倍は寶曆十三年に年五十八歳で歿したとあるから、父清信四十二歳母三十二歳の時の子となる譯で、長子としては餘り遅過ぎるやうであるし、且つ『木版浮世繪大家畫集』に清倍の畫の傑出して居るものは、若壯の頃畫いた丹繪であるが、この丹繪の行はれたのは、寶永正徳頃であるから、清倍の歿年を寶曆十三年五十八歳とすれば、丹繪をかいたのは、十歳未滿の時となるので、この説は誤であら

うと記してある。兎に角清倍の生れたのを元祿の初め頃としないと作品とあはないやうである。

前期清信傳に於いて、二代清信と清倍との關係に就いて一寸述べて置いたが、無名翁隨筆も古畫備考も浮世畫人傳も二代清信を擧げて、清倍を省いて居るし、古畫備考には二代目清信一作清倍是れより畫風奇麗になるなりとあり、浮世畫人傳には二代清信の歿年を寶曆十三年二月二日と記し、名人忌辰錄には清倍の歿年を寶曆十三年十二月二日年五十八としてある。又武江年表の寶曆年間記事中には鳥居清倍は見えるが、鳥居清信は記してない。かたゞ従來の傳記書類には二代清信と清倍とは異名同人であると考へたものらしい。けれども木版浮世繪大家畫集所載の寛延四年(花賣若衆圖に明記せる年號)は清倍の歿前十二年で、此頃まで二代清信が居つたのであるから異名同人とは受けとれない。彼の Strange 氏の「Japanese Colour Prints」や又は「The Art Institute of Chicago. Catalogue of a Loan Exhibition of Japanese Colour Prints」などでは「二代清信を

花賣若衆圖

二代鳥居清信筆



木版浮世繪大家畫集所載

うと記してある。兎に角清倍の生れたのを元祿の初め頃としないと作品とあはないやうである。

前期清信傳に於いて、二代清信と清倍との關係に就いて一寸述べて置いたが、無名翁隨筆も古畫備考も浮世畫人傳も二代清信を擧げて、清倍を省いて居るし、古畫備考には二代目清信一作清倍是れより畫風奇麗になるなりとあり、浮世畫人傳には二代清信の歿年を、寶曆十三年二月二日と記し、名人忌辰錄には清倍の歿年を寶曆十三年十二月二日年五十八としてある。又武江年表の寶曆年間記事中には鳥居清倍は見えるが、鳥居清信は記してない。かたゞ従來の傳記書類には二代清信と清倍とは異名同人であると考へたものらしい。けれども^{木版}浮世繪大家畫集所載の寛延四年(花賣若衆圖に明記せる年號)は清倍の歿前十二年で、此頃まで二代清信が居つたのであるから異名同人とは受けとれな^ス。彼の Strange 氏の「Japanese Colour Prints」や又は「The Art Institute of Chicago, Catalogue of a Loan Exhibition of Japanese Colour Prints」などでは「二代清信を

花賣若衆圖

二代鳥居清信筆



木版浮世繪大家畫集所載

清倍の兄と見做し、兄清信の死後、清倍が清信の號を襲ふたのであらうと記してあるが、これは二代清信の作品が稀であるから、同人は清倍の兄で早世した人であると斷定したものであると思ふ。

兎に角、浮世繪派畫集所載の清倍筆松本幸四郎圖と、二代清信の若衆花賣圖とは、畫風に似守つたところも見えるが、二人の關係に就いては詳しく解らない。只不思議なのは二代清信の作品が妙いことである。

清倍は畫を父に學んだのであるが、父よりは寧ろ上手であつた。遺品には丹繪、漆繪、草繪、芝居看板番附、黒本の挿畫などがある。黒本は、日本小説史に、蟹は金猿は榮一冊、煙草戀中立二冊、猩々酒屋三冊、新板男色鑑二冊など記してあるが、肉筆は甚だ少く、浮世繪派畫集所載の殿中傀儡戲圖を知つて居るばかりである。

草繪は、此花に清倍筆の市村龜藏が猪早太に扮せる圖を載せてある、この外市川團十郎が白酒賣に扮せる漆繪もある。又、木版浮世繪大家畫集には、漆繪

の役者繪木版畫や、掛物繪丹繪の男達圖、同矢根五郎圖、同狂言圖及び墨摺の市村座番附などが載つて居るから、これらの作品に接して、清倍の筆意の變化した跡、即ち鳥居家特有の剛勁なものや或は婉麗なものなどを味ふがよからうと思ふ。この外、細繪の漆繪に金粉を用ひた、中村久米太郎、市川龜藏、荻野伊三郎、市川團十郎、市川海老藏、瀬川菊次郎、京四條下り佐野市松、尾上菊五郎、松本幸四郎などの役者繪を高嶺家で見ることがある。

彩色摺に就いては既に述べて置いたが、始め紅と緑との二色を用ひ、この二色を重ね摺にして、紫を出した位のものであるから、二色繪といふ稱が起つたのであるといふ説もある。が、清倍の死んだ寶曆十三年から七年後に歿した鈴木春信は、數遍摺の版畫即ち錦畫を發明した程であるから、此頃は年一年と版畫刷術上に改良を試みたと見える。「浮世繪派畫集」第三冊に錦畫の古雅なもので、描線稍々流暢のものもあるとして、清倍筆の俳優松本幸四郎圖と英人ゼー、エス、ハッバー氏藏の美人少女圖との版畫を載せて居る。後者は三枚續き

で、江戸新吉原、京都島原、大阪新町の遊女と禿の二人立を藍と紅で彩つたものらしいが、古くなつてよくは解らない。又同畫集同冊中に高嶺家藏の無落款美人一人立圖を載せて、傳鳥居清倍筆とし、此圖果して清倍ならば、先の清信の美人少女圖と同じく、頗る懷月堂風に得たる所ありて、而かも技巧は懷月堂諸家の及ぶ所にあらざるのみならず、鳥居派の作家中清長の外能く此の人の右に出づるものなからんと疑を存して論じてあるが、Murons, B. Huish 氏の「Japan and its arts」の中には、懷月堂風の清倍筆美人一人立圖を載せてあるから、矢張父の如く懷月堂風の畫も描いたものと見てよからうと思ふ。

六 同期浮世繪畫家